

---

# Z 症

六十一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Z症

### 【Nコード】

N3434D

### 【作者名】

六十一

### 【あらすじ】

ある夏の日、彼女の事故を目撃した時から、少年の日常は崩壊していく。あるはずのない事故。帰ってこれないはずの人。そして『Z症』。最後に彼が見出したものとは？

## 第1話

Z症

『Z症についてのお知らせ』

最近、市内全域において“Z症”なる疾患が流行しているという流言が飛び交っている模様ですが、これは全く無根拠な噂に過ぎません。

心身の不調を訴え、ご自分がZ症ではないかとご心配なさる方々が、急激に増えている現状を鑑みて、当市役所が調査、確認したかぎりでは、かぜ症候群及び、いわゆるインフルエンザのことです流行性感冒や、心因性の無気力症を勘違いなされていると思われるものが全てであり、当市において流行が噂されているZ症とは、ズーノーシス等現存する病気の略称とは全く違い、架空の病気であるという結論に達しました。

そもそもZ症なる疾患に関して伝え聞く諸症状は、荒唐無稽で甚だ存在を認めがたく、その流言は一部心身症患者に対する、ひいては当市民全員に対する悪意ある嫌がらせに他なりません。

当市役所といたしましても、当問題につきましても引き続き調査し、事態の収拾に尽力させていただき所存ですが、市民の皆様方におかれましては、十分にご留意いただき、ご家族、ご近所の方々の不安感を悪戯に煽る事がございませんよう、何卒ご協力お願い申し上げます。

地方紙『水無瀬新聞』折込

水無瀬市役所発行『水無瀬だより』より抜粋

暑い日だった。

信号待ちで立ち止まった大通りの十字路の空気は、立ち上る熱気によって揺らめいていた。

4車線ある車道の両脇に植えられた、背の高い木々の影も、正午を1時間ばかり過ぎただけの今、疎らに、小さく、歩道を歩く人々の脇に落ちるのみで、頭上から降り注ぐ強烈な日差しから、僕達を守る余裕なんて、とても無さそうに見えた。

僕、にうたけんいち新田賢一は、来年春に高校受験を控えた受験生で、中学最後の夏休みをの一日を、不本意ながらも勉学に捧げるべく、市の中心部にある、『水無瀬中央図書館』へと向かっていた。

東の一部を太平洋に面し、他方を峻険たる山々に囲まれた僕らの町『水無瀬市』は、いわゆる盆地で、熱気が内にこもり易い地形をしている。海風が吹けば、いくらか凌ぎ易くはなるものの、今日のような風の無い夏の日の苛烈さは、筆舌に尽くしがたいものがあった。

額から流れ顎を伝う汗を、半袖シャツの袖口で拭う。それでもすぐそばから、額に新たな汗の珠が浮いてくる。

早く冷房の効いた屋内に逃げ込みたい。

その一心で、十字路の向こうに見えている図書館の入り口を見つめた。

あそこまでたどり着けば、この暑さともさよならだ。

その時、ふと視界の隅に、見覚えのある顔が見えた気がした。

吸い寄せられるようにそちらを向いた途端、僕の心臓が跳ね上がった。

彼女、だ。

夏の日差しのせいではない熱で頭に血が昇る。十分過ぎる程の発汗が、まだ足りないとはかりに勢いを増す。

僕が渡ろうとしている横断歩道と平行しているもう一方の横断歩道で、彼女は同じように信号待ちをしていた。

向かう方向は同じ　もしかしたら彼女も図書館に行くのかもし

れない。

そう思うと心が躍った。

そうであれば図書館の入り口あたりで、丁度鉢合わせになる。

急に自分の格好が気になりだす。

シャツが汗のせいでびつたりと背中に張り付いている。頭の天辺からつま先まで汗まみれだ。

まずい 清潔感ゼロ。

カンカンと照り付けている太陽が恨めしいが、夏の暑さを呪っても始まらない。

とにかくこの汗をなんとかしないと……

僕は急いで自分のリュックの中を探つて、スポーツタオルを見つけて出した。

これでさつと汗を拭いてしまおう。

おもむろに取り出そうとして、そのことにはたと気づき、手を止める。

ちよつと待て、突然人前でタオルで体を拭きだしたら、おかしくないか？

おかしい……と思う。

ちらりと周りを見ると、僕のそばにいるのは4、5人ほど。信号を渡った向かい側には、幸運にも一人もいない。

チャンスだ。

僕はさりげなく最後尾に後退した。これで大丈夫。素早く済ませれば誰も気づかないだろう。

念のため、向こうの信号で待っている彼女の方を確認すると。目が合ってしまった。それも、ガツンと頭の中で音がする程に。

彼女との距離は十数mほどだろうか。それでも視線が交錯したことは、はつきりと分かった。

彼女はすぐに視線を前に戻したが、きつと向こうも僕を見つけたはずだ。

……まあ……ただの自意識過剰かもしれないけ

れど。

はっと自分の不自然な格好に思い至る。

スポーツタオルを胸の前で握り締めて、ぼんやり立っている中学生男子。

やってしまった・・・ちよつと格好悪い。

僕は彼女の方を意識しながら、タオルで顔の汗を拭いた。とりあえず第一段階終了。

・・・一体何をやってるんだらう。

彼女の姿を見て、完全に浮き足だっている自分に辟易して、目を閉じて溜息をつく。

瞼の裏に、彼女の姿が浮かんだ。

彼女を初めて見たのは、中学一年の夏休みだった。

今から丁度二年前のこと。

その時の光景は、いまでもはつきりと思い出すことができる。

やはりこうして図書館に通う途中だった。

その日は今日のように暑い日で、体が溶け出してしまいそうな炎天下、僕は堪らず大通りのファーストフード店に飛び込んだ。

鼻腔を通り抜ける、冷たい店内の空気にホッと息をつき、炭酸飲料を注文して、一階の窓際の席に着く。

微かな優越感とともにボンヤリと通りを眺めながら、冷たい炭酸飲料をストローで喉に流し込む。

炭酸が弾ける爽快感に力が抜けて、深く背もたれに体を預けた瞬間、その姿勢のまま、僕は固まってしまった。

全てが熱せられ、歪んで見える通りを、まるで温度を感じていないのかと思うほど涼しげに。

彼女が歩いていた。

白い、ただ白く光るワンピースの裾を、やわらかくなびかせて。

長く癖の無い黒髪が、歩を進める度に背中中で弾み、たっぷりと含んだ太陽の光を辺りに散らす。

手足がしなやかに交差していく。

挑むように陽光を透かし見る、細められた双眸。長く伸びた睫毛が、すつきりとした下瞼に影を落としていた。

彼女が通った後の空間が、透き通っていくような不思議な感覚。日傘も帽子も無く、火そのもののような日差しも、煮えたぎる湯のような湿気を含んだ空気もなにもかも、自分を害することなどないのだ、とでもいう歩き方。

その姿を目にして、得体のしれない衝動が湧き上がった。

目の奥で火花が散ったようだった。

強烈な、抑えがたい心の躍動。

息をするのも忘れて、僕は彼女を見つめ続けた。

時間にすれば、それこそほんの数秒のことだったろうと思う。

けれどその数秒は、僕の中に決して消えない光景として残ることになった。

その後、理解不能な混乱を収めるため、僕は食べたくも無いハンバーガーを、二つも胃の中に詰め込んだ。

後日それとなくそのことを話した友人は、いとも簡単にそれを断定した。

「その子のこと、好きになったんだろ」と。

なるほど、と思うと同時に、僕は慌てた。平静を装って、その友人には「そうなのかな」と返したが、心臓はこれまでにないほど鼓動を早めていた。

頬が紅潮して、胸が高鳴った。きつとうまくごまかせていなかったらう。

そして思った　これが、人を好きになる、ということなのだ。恥ずかしながらも、僕はその時まで、恋愛という感情を持ったことが、自覚したことがなかった。

僕が彼女を見たときの、あの激しい感情のざわめきは、いわゆる恋愛感情と呼ばれるものだったのか。

そう考えると自分が陥った収集不能な混乱も、確かに納得がいった。

なにかがすっきりとどこかに収まったように、僕の気分は晴れ渡った。

その感覚を、どこかで良く知っているはずなのに、自覚できずに苦しんだことが、まるで嘘のように。

全くどこの誰なのかも分からない女の子。

僕はその女の子を一目見て、そして恋をした。

これだけなら、どこにでもあるいわゆる「青春」の一コマだったのだろう。

やがてはそんな女の子を見たことも忘れて、また別の恋が始まる。大抵の「一目惚れ」というものは、そんな終わり方をするものらしい。

僕のこれも、その程度のことだったはずだった。

しかし、僕のこの恋は、そのまま消えることはなかった。

僕は、程なくして彼女と再会することになった。

再会の場所は、僕の通う学校の廊下で、だった。

僕と同じ学校の制服を着て歩く彼女の姿を見たとき、僕は心臓が止まりそうなほどに驚いた。

こんな偶然が、本当にあるなんて。

実は彼女が、僕と同学年で、二つとなりのクラスの女生徒だと知って、何か運命めいたものを感じずにはいられなかった。

そんなばかな、と笑われるかも知れないが、その時は本当にそう感じたのだ。

それから僕の視線は、知らず知らずのうちに、彼女の姿を探すようになっていた。

運動場で、食堂で、廊下で。

クラスの違う僕と彼女の接点は、多いとはいえなかったが、僕は彼女の姿を見つけるたびに、涼やかな、けれどしかし、決して弱々

しさを感じさせないその姿に見入った。

彼女の名前は「若宮 加奈」（わかみや かな）成績は優秀。運動は普通。容姿は、ごく個人的には、文句なし。

では性格はといえば、物の言い方がストレートで、人によって評価が分かれていた。

冷たいという者もいれば、裏表がなくていいという者もいた。

有体にいつてしまえば、女子よりも男子の人気の方が高いタイプ。それが今までに僕が知り得た、彼女に関する情報の全てだ。

今まで彼女とは、挨拶もしたことが……ない。

時折視線が合うような気がする程度。それもきつと僕の思い過ぎに違いない。

自分でもなんだかどうしようもないと思うけど、僕には、彼女に話しかける勇気が、どうしても持てなかった。

「何が不安なんだよ？知り合いでもない状態から悪くなる関係なんてないだろ」

そう友人は言う。

僕もそう思う。

ではなぜ話しかけることが出来ないのかと考えてみればそう多分、怖いのだ。

友人が恋愛だと言い切ったあの感情を完全に受け入れたら、その流れに押し流されてしまいそうなことが、なぜか 怖い。

彼女に話かけてしまえば、いやでもその感情の濁流に飲み込まれ、自分が今の自分とは違うものになってしまいそうで 怖い。

だからといって彼女に対する感情の全てを、自ら放棄してしまう勇気もない。

だめな人間なのだと、自分でも思う。

そして、そんな自分でい続けたくないとも、強く思っていた。

開いた目に、痛みすら伴って光が飛び込んでくる。

目を凝らさなければ信号の色すら分からない程の日差しを、手の

ひらで遮りながら思う。

今が、もしかしたら初めて彼女に話しかける、最大のチャンスなのかもしれない。

たった十数メートル向こうで、僕と同じように信号待ちをしている彼女を意識する。

中学生最後の夏。卒業まで、あと半年を残すばかり。

長いようで、きっと短いだろう半年。

それが過ぎれば、僕と彼女は、学校を卒業する。

彼女の今後の進路を僕は知らないが、きっともう会う機会も無くなることだろう。

それまで僕は、彼女と一言も言葉を交わさないまま、この気持ちを持って余しながら、過ごしていくことになるのだろうか？

それが過ぎた後、僕はそうやって最後の半年を過ごしたことを、後になつて後悔したりはしないだろうか？

「こんにちは、もしかして中央中の人ですよね？」「こんにちは、僕、中央中の新田です。はじめまして」なんでもいい、話しかけさえすれば、とにかく何らかの変化が、僕と彼女の間に起こるはずだ。その後になつてどうなるのかなんてわからないけど。

けれどこのまま過ごしていくよりは、きっといいはずだ。

よし、決めた。

もし彼女の目的地が、僕と同じ図書館だったなら。 。  
思いきって、話しかけてみることにしよう。

ふと見上げれば、信号はすでに青に変わっていた。

結局体を拭くことはできなかったな、と思いながら、僕は慌てて横断歩道に足を踏み出した。

唐突に、甲高い、耳障りなブレーキ音が、交差点に響き渡った。鼓膜を破らんばかりの大音響のクラクションに、体が硬直する。

反射的に音源を探して、筋肉の引き攣った首をギリギリと廻らす。皮の弛んだ太鼓を叩くような鈍い音が、間髪入れずに続いた。

背筋のゾツとするような、嫌な音だった。

交差点の中央に、大型のトラックが、車体を斜めにして止まっていた。

夏の日差しを照り返すアスファルトに残った、黒々としたブレーキ痕が、やけに目につく。

それは、右に左に蛇行しながら、向こうの横断歩道のほぼ中央を突っ切っていた。

先程のクラクションに負けない程の大きな悲鳴が、辺りに響く。

あまりの突然の出来事にボンヤリと眺めた向こうの横断歩道の様子は、今自分が立っている場所から然程離れてはいないというのに、まるで映画のワンシーンか何かのように、どこか遠く、作り物めいて見えた。

頭を抱えて悲鳴を上げている人。

腰を抜かして座り込んでいる人。

そしてある人は、こちらの横断歩道を指差していた。

しかし、それは違っていった。

その人が指を差していたのは、僕のいるこちらの横断歩道ではなかった。

その指先はもっと、上を向いていた。

周囲に何かを撒き散らしながら飛んでくる、黒い影があった。

投げやりな放物線を描いた“それ”は、べちゃりと水っぽい音を立てて地面に落ちると、2度程低くバウンドして、僕のすぐ目の前まで転がって、止まった。

ゆっくりと視線を下げて、“それ”に焦点を合わせる。

膝から急激に力が抜けた。

誰かの悲鳴も、怒声も、いらだったような車のクラクションも、全てが。

目の前の異常な光景に溶けた。

それを見て最初に頭に浮かんだのは、糸の切れた操り人形だった。手も、足も、てんでバラバラにでたらめな方向を向いている。くたり、と崩れ落ちた、あやつり人形に似ていた。

違っているのはそれが、本物の人間の体であるということだった。小さく纏まった人間の体で作られた小山。

その裾野から、湧き出す泉のように、血溜まりが広がっていく。へたり込んだ僕の視線より尚低い場所、小山の頂点には 彼女の顔があつた。

意味が分からない。なぜ、彼女の顔が、ここに、僕の目の前に、あるのか。

彼女は確か、向こう側の、今、何人かの人が泣いたり叫んだりしている、あつちの信号を渡っていたはずだ。

それに变だ。

彼女の顔の下についている体は、こんな形をしていない。

夥しい血に塗れた、元がどうだったかもわからない様な体。

そんな人間はいない。

こんな状態では、人間は生きていられない。

生きていられない？

早く輸血とかをした方がいいんじゃないかな？

だってこんなに沢山、血が出ちゃっているんだし。

鳩尾の辺りがヒクリと脈打つ。

信号無視の大型トラック。

のたうつ蛇のようなブレーキ痕。

横断歩道を渡っていたはずの彼女。

思考が、うまく繋がらない。

腹筋が痙攣しているのが分かる。

それが吐き気でないことが分かり、全身に鳥肌がたった。

笑いの気配が迫っていた。大きな大きな笑いの気配。

だめだ。

がたがたと体が振るえだす。短い笛のような呼吸を繰り返す。

今はだめだ。

僕の心の中のどこかで、警鐘が聞こえていた。

そうだ、きつと今笑ったら、もう“戻って”来られなくなる。

感覚の鈍い唇をきつく噛んで、その衝動をやり過ごす。

頭が真っ白になってなにも考えられないのに、見えている光景だけは、鮮明に網膜に焼きついた。

目を逸らすことも、叫ぶこともできず、僕はただ、変わり果てた彼女の姿を見つめ続けた。

体は、その部分がかろうじて判断できるといった程に崩れてしまっているのに、なぜか顔には、傷一つなかった。

だから僕は、この無残な肉塊が彼女だとわかったのだ。

小さく開いた口の端から溢れ出す血の泡と、乱れて絡みついた髪の毛以外、先程ちらりと遠めに見た彼女と、なにも変わったところはない。

顔の表情は安らいでいて、微笑みを浮かべているように見えた。

こんなにも柔らかな彼女の表情を、僕は見たことがなかった。

僕が見た中で、きつと、もつとも自然な、彼女の表情。

その中で瞳の輝きだけは、失われていた。

本当は一目でわかっていた。

彼女は、死んでしまったのだ。

信号無視をしたトラックに跳ね飛ばされて、彼女は死んでしまった。

彼女の顔を、改めて見つめる。

最後の瞬間、彼女は何を見て、何を思っていたのだろう。

きつと自分の身になにが起きたのか、少しも分からなかったに違いない。

信号を渡り終えたなら、話してみようかと。

そんな言葉が頭の中に浮かんできた。

先程まで僕が抱いていたその夢想は、もう叶わない。

むせ返るような血の匂いに混じって漂ってくるゴムタイヤの焼け  
た匂い。

何故かそれが、これが今実際に起こった現実の出来事なのだという  
ことを、強く僕に意識させた。

## 第2話

それからどうやって家に帰りついたのか、余り覚えていない。

相当自分を見失ってしまっていたのか、事故現場に到着した救急隊員に引き起こされるまで、僕は彼女を見つめ続けていたようだった。

しきりにこのまま車に乗って病院へ行くよう勧められたのは覚えているが、とてもそんな気にはなれなかった。

何も考えられなかった。鉛を詰められたように全身が重くて、とにかく早く眠りたい。

その時はただそれだけだった。

それに、おそらく彼女も運ばれるのだろうと同じ病院に、自分も“生きて”運ばれることに、どこか罪悪感のようなものを感じました。現場は相当混乱していたようで、ふらふらと覚束ない足取りでその場を後にする僕を呼び止める者は他にいなかった。

それから2日間、僕は眠り続けた。

後から聞いた母の話では、ご飯の用意が出来たといってもベッドの中から生返事を返すだけで、一步も部屋から出てくることはなかったという。

何かの病気ではないかと病院に連れて行こうともしたのだが、僕は頑なにそれを拒んだそうだ。

全然そんな記憶はない。が、そういわれてみれば、そんなことがあったようにも思う。

とにかく僕の中からは、事故の後二日間の記憶は、すっぽりと抜け落ちてしまっていた。

そして3日目の朝、僕は目を覚ました。

「あら、起きてきたのね」

二階の自分の部屋からダイニングに降りてきた僕を見て、母は妙

に弾んだ声と、満面の笑みで僕を出迎えた。

母のその笑顔の理由はその時はわからなかったが、その話を聞いた後では納得できる。

相当、心配をかけたのだろう。

僕に変わりがないことを確認すると、ここ2日間眠り続けていたことに対して、みっちりと言を聞かされた。

それに関しては、本当に申し訳ないことをしたと思う。

話の途中何度かその“理由”について聞かれたが、僕は「なんでもない」で押し通した。

その席には父もいたが、普段から寡黙な父は「体の調子は本当に心配ないんだな？」と念を押したきり、他に僕に何かを聞くようなことはなかった。

その内、僕がどうあっても理由を話さないことが分かったのか、母もそれ以上この件について追求することを諦めたようだ。

「ご飯の前にコウちゃんに挨拶してきなさい。二日もサボったんだから、ちゃんと挨拶するのよ」

そう言い残してキッチンに入ってしまった。

僕は無言で頷くと、仏間へと向かった。

仏壇の正面に据えられた座布団に正座すると、手を合わせ、線香を立てる。

開かれた仏壇の中央で、止まってしまった年齢と同じく小さな遺影が、僕をいつもと同じ笑顔で出迎えた。

小脇に置かれた位牌の、小難しい、僕には読むこともできない戒名は、かつて「コウちゃん」と呼ばれた少年の、現在の名前だ。

コウちゃん　僕の双子の弟は、今から11年前に野犬に襲われて、死んだ。

活発で、外で遊ぶことが大好きだったコウちゃんは、その日も幼稚園から戻ると、玄関先に、通園用の当時子供に人気だったキャラクターのプリントされた小さなバックを投げ置いて、近くの児童公園へ向かったきり、戻ってこなかった。

その日のことを、僕は、はっきりと覚えている。

小さな頃病気がちだった僕は、その日も幼稚園で軽い発熱を起こしてしまい、保健室で寝ていたため、帰るのが遅れたのだ。

迎えに来た母に連れられて帰り着いた玄関に、ポツンとおかれたバツクを見て、僕は憤慨したものだ。と。

またコウちゃんは、僕をおいて遊びに行ってしまった、と。

本気で怒っていたわけではない。きつとおいていかれた事が寂しくて拗ねていたのだと思う。

苦々しげにそのバツクを一瞥して、僕はコウちゃんと共用していた子供部屋に駆け込んだ。

ふてくされて頬を膨らませながら、お気に入りの絵本を読み返している母がやってきて言った。

「そんなに拗ねないで、帰ってきたのがこんな時間なんだからしょうがないでしょう？もう暗くなるし、コウちゃんを迎えにいったら、すぐご飯にするからね」

いつでもべったりとしているほど、仲の良い兄弟だったのかと聞かれれば、自信はない。

コウちゃんはいつも外で遊んでいたけれど、病弱だった僕は、家にいることの方が多かった。

けれど、決して悪かったわけでもない。

僕の調子が良いときは、手を引っ張るようにして公園に連れ出して、引っ込み事案の僕に新しい友達を紹介してくれたり、悪いときにも、自分が外で遊びたいのを曲げて、僕と一緒に一冊の絵本を、読んでくれたりもした。

幼稚園の先生にはいつも「コウちゃんの方がお兄さんみたいね」と言われていた。

そんなコウちゃんを、僕は好きだった。

憧れていたと言ったほうがいいかもしれない。

両親は僕たち二人に分け隔てなくやさしく接してくれたから、どちらかがどちらかを羨んだりすることがなかった。

だからこそだと思っ。

僕は、元気で運動の良くてできる、わがまま放題の年齢の男の子にしては、世話好きと言えただろうコウちゃんを、劣等感を持つことなく、素直に自分に無い才能を持つ者として、好きでいることができた。

先を走るコウちゃんに、ついていく僕。

そうやって、二人で成長していくはずだった。

遺体の損傷が激しいから、と、最後のお別れは、させて貰えなかった。

そんな理屈が子供だった僕に分かるはずもない。

僕は泣き泣きして、両親や周りにいた人達を困らせた。

その時に僕は教えられた。

そうだった理不尽な別れ方が、この世界にはあるのだと。

先日の事故の様子をふと思いつく。

2日も寝続けていたせいで頭がまだ働いていないのか、あれが夢の中の出来事だったようにも思える。

はつきりとその光景が脳裏に浮かぶにつれ、キリキリと頭が痛み出し、僕はそれ以上そのことを思い出すのを止めた。

同じ時間に生まれ、同じ幼稚園に通っていた、僕と同じ姿をした少年。

彼は死に、僕は、こうして生きている。

同じ時間に、同じ交差点に立ち、もしかしたら同じ場所へ向かっていたのかも知れない少女。

彼女は死に、僕は、まだこうして生きている。

僕は知っていたはずだ。

突然に人はいなくなるのだ、と。

ある日突然に、お別れの言葉もなく。

そこに予感はない。条件もない。

向かい会って話している人物が、次の瞬間にいなくなっていることだって、あるかも知れない。

そう知っていたはずだ。

この胸のもやもやとしたものは、後悔なのだろう。

もつとちゃんと出来たはずなのだ。それだけの時間は、十分にあった。

それなのに、僕は。

コウちゃん。

遺影に向き直ると、僕は、心の中でコウちゃんに語りかけた。

コウちゃん。

お願いがあります。

どうか このお願いを聞いてください。

そっちに女の子が一人、行きます。

名前は「わかみや かな」

とても可愛らしい、素敵な女の子です。

彼女は2日前、交通事故に会って、そっちに行くことになりました。

突然のことだったから、そっちについても、きっと右も左も分かんずに、困ってしまうはずです。

見つけたら、親切にしてあげてください。

恥ずかしいけれど、コウちゃんには伝えておきます。

その女の子は、僕が好きだった女の子です。

僕は女の子を好きになったことがなかったので、どのくらいかはわかりません。

でも、自分の中では一番だったと思っています。

けれど僕は、それなのに 話をしたこともないので、僕の名前を出してもわからないと思います。

だから、もし彼女と会うことができたとしても、僕の名前は出さずにいてください。

彼女は気の強そうな子なので、小さなコウちゃんには、怖く見えるかもしれませんが。

でも、いじわるな子ではないと思うので、大丈夫です。

こっちでは僕は 彼女に親切にしてあげられませんでした。

だから、その分もどうか コウちゃん。

どうか。

悔しかった。

どうしようもなく、悔しかった。

合わせていたはずの手のひらは、いつの間にか正座の上で握りこぶしになっていた。

知らず知らずの内に、涙がこぼれていた。

何をいまさらと、自分が馬鹿みたいに思えた。

だって僕は、知っていたはずなのだ。

いなくなった人間は、決して帰ってはこないのだ、ということも。

### 第3話

一度、洗面所によってから、僕はキッチンへと入った。

「今、賢一の方準備するから、座ってて」

テーブルの、自分の定位置につくと、母がにこやかに話しかけてきた。

先程までの、少しその場に居辛いような両親の雰囲気は、もうない。いつもと変わらぬ母の振る舞いにほっとする。

すぐ横には、いつもと同じように日課の新聞を読んでいる、父の姿もあった。

僕の日常が、確かにここにはあった。

目の前で同じ学校の生徒が轢き殺されてしまうような、非日常からは、ここは大きく隔たった所にあるのだと、安心する。

穏やかな表情で、かいがいしく家族の食事を用意する、若作りの母。

この母に3日前の出来事の、一部始終を話したなら、一体どんな顔をするだろうか？

きつと何事もないように、僕を励ますだろう。なんともない顔をして。

けれど心の中ではショックを受けるに違いない。きつと傷つく。

あの時のことを、きつと思いついてしまつて違いない。

平和な食卓の様子を眺めながら、ほつと一人息をつく。

やはり事故の事を話さないで良かったと、僕は思った。

家族3人での食事を終え、私立高校の教諭をしている父が学校に出勤していくと、家の中は一層のんびりとした空気になった。

母の入れてくれたお茶を飲みながら、居間でテレビを見つつ、他愛ない話をしていると、随分気持ちいがやわらいだ。

実は、先日の事故のニュースが流れないかと、内心戦々恐々とも

していたのだが、結局そんなことはなかった。

3日前の事故など、目まぐるしく移り変わるこの世界では、すでに風化してしまった出来事なのだろうか？

そう思うと、逆に事故の関連ニュースを、意識的に探してしまっている自分に気付いた。

一度気になりだすと、どうしてもそのことが頭から離れない。

座りの悪い気持ちで、ついに僕は、テレビでやらないならと、新聞をめくりだした。

そうしながらも、どこかでその記事を見つけないかと思っっている自分もいた。

矛盾する感情に戸惑いながらも、目は忙しく紙面の上を滑り、事故の記事を探す。

しかし結局新聞にも、事故の記事は載っていないかった。

全国版だからかと思いい、それとは別にとっている地方紙「水無瀬新聞」にも目を通してみることにした。

こちらの方は、父は読んでいかなかったようだ。新聞に挟まれたままになっている折り込みチラシの類を、ゴミ箱に捨てるのももどかしく、僕は新聞をめくりだした。

こちらの新聞にも、交通事故の記事は載っていないようだ。もっとも大きな記事は、若者の乗る自転車がお年寄りと接触したが、謝りもせずに走り去ったというものだった。

「どうしたの？賢一。何か、気になることでもあるの？」

食い入るように新聞に見入る僕に、母が声をかけた。

普段、新聞など読まない僕の行動を見て、母は首をかしげている。

「ああ、うん、ちょっと……」

僕の歯切れの悪い受け答えに、母は益々不思議そうな顔になった。その目に微かに、なにかを探るような色が混じっている。

外見だけに止まらず、気も若く、僕と友人でもあるかのように振る舞いたがる母は、これ以上僕の言動におかしなところがあれば、あれこれと聞き始めるに違いない。

それは、避けたかった。

仕方なく新聞を閉じようとしたとき、僕の目に、一つの記事が飛び込んできた。

『市内中央交差点、ガス漏れ事故続報』

去る 月×日、午後一時頃、水無瀬市中央2丁目交差点において起きた、ガス事故の詳細が分かった。

事故の原因は、広く水無瀬市地下に分布する、地下ガス溜まり処理のためのパイプの一部破損であったことが、市当局の調査により判明した。

この事故は、多量に吸い込むと幻覚症状等、意識を混濁させる性質の認められる地下ガスが、一時地上に噴出したというものだ。

事故発生当時、付近を通行中の市民数名が、気分が悪いなどの症状を訴え通報、病院に運ばれた。

問題のパイプの破損箇所の修復工事はすでに完了し、市役所当該担当員の話では、同箇所の再度のガス漏れの危険性は当面ないとしているが、近年老朽化の叫ばれる、パイプ管等地下設備の全面的な点検、補修見直しも含め、市の今後の的確な対処姿勢が問われる。

僕は慌てて手を止め、もう一度その記事を読み直した。

日時は僕が目撃した、交通事故の起きた時間と一致していた。

場所も写真付で紹介されているが、間違いない。あの事故の起きた交差点だ。

写真の中には、その日僕が行こうとしていた図書館が、はっきりと写っている。

これは 3日前、あの交差点で 二度、事故が起きたのか。1つは僕の見えた交通事故。そしてもう1つ、ほぼ同時刻、同じ場所で起きたガス漏れ事故。

そんな事があるのか。

あるのかもなにも、こうして実際に起きているのだ。  
嫌な偶然　ということなのだろうか。

「賢一？ちよつとどうしたの？酷い顔色じゃないの」  
視界が、揺れていた。

「うん、風邪・・・かな。ちよつと寒気がする」

「夏風邪？大丈夫？病院にいった方がいいんじゃないかしら。あなた体弱いんだから」

「母さん、それ子供の頃の話じゃない。大丈夫、ちよつと横になれば、すぐ良くなるから」

なんとか笑顔を作ると、僕は話を切り上げて、部屋に戻ることにした。

階下から聞こえる、心配そうな母の声を振り切るように、僕は階段を上がると、後ろ手に自室のドアを閉め、逃げ込むようにベッドに潜り込んだ。

何故か、恐ろしかった。

毛布を頭から被り、新聞の記事を思い出す。

『市内中央交差点、ガス漏れ事故続報』

別に僕が怖がる理由など、これっぽっちもないはずの事故。

怖いのは　事故そのものではない。

事故の記事を読んだ時に、僕は違和感を感じた。

その違和感の正体がなんなのか、僕には分からない。

それを確認することが、怖かった。

どうやら僕は、毛布にくるまったまま、いつの間にか眠ってしまっていたようだ。

寝ぼけ眼で枕元の時計を見ると、もう午後になっている。

突然、僕が起きるのを見計らったかのように、部屋のドアがノックされた。

「賢一、寝てるの？」

ドアの向こうから問いかける母の声に、上体を起こす。

「うつん、今起きた。大丈夫、体ならなんともないから」

「そう……良かった。それでね、賢一。賢一にお客様が見えてるのよ」

「ん……誰？」

「何でもね、市役所の方らしいんだけど。ちょっと賢一に話があるらしいの」

市役所　なんだろう？

起きぬけの頭で、ぼつとそんなことを思ったが、続く母の言葉にぎよつとした。

「賢一、あなた　3日前の昼頃、大通りの交差点に、いた？」

眠気は一瞬で吹き飛んでいた。

「その事でね、お話があるんだって。ねえ……賢一、聞いてる？」

じつとりとした汗が背筋をつたう。

「……うん……聞いてる」

返す声は、かすれていた。喉がカラカラに渴いていて、うまくしゃべることができない。

「何かあったの？」

母は鋭いほうではないものの、先日僕に何か起きて様子がおかしいのだ、ということぐらいは、薄々勘付いているだろう。

悪いことなど何もしていないが、隠し事をしているのには違いがない。

少し胸が痛んだ。

「なんでもない。大丈夫だよ」

半ば自分に言い聞かせるように言う。

「着替えてすぐ行くから、悪いんだけど、少し待っててもらってわかったわ、と答えて、母の足音は遠ざかっていった。

僕はそれからしばらく呆然として、一人部屋に佇んだ。

ぐっしょりと、汗で濡れたシャツを着替えながら考える。

市役所の間人が、一体なんの用事だろう？

そんなの決まってる。3日前の、あの事故のことだ。でも、おかしい。

それなら話を聞きに来るのは、市役所ではなくて、警察のはずだ。もしかしたら。

脳裏に、今朝みた新聞の記事がよぎる。

『市内中央交差点、ガス漏れ事故続報』

その事故の事だろうか？

十分有り得るように思える。場所も同じ、時間もほぼ同じ、そんな事故なのだから、事情を聞きに来ることもあるのかもしれない。

それにしたって、分からないこともある。

まず、理由。

原因も分かっている、対処も済んでいる事故の、何を聞きたいのか？

そして よりこちらの疑問の方が大きいんだけど どうして、僕があのだ交差点にいたことを知っているのか？

何にしる、名指しで自宅に押しかけてくるぐらいだから、只事ではなさそうだ。

僕は着替え終わると、憂鬱な気分で、重い足を引き摺るように階下を下りた。

居間に入ると、ソファーに姿勢を正して座っている、20代半ばくらいと思しき男性がいた。

黒髪をきつちりと七三に分け、銀フレームの眼鏡をかけて、濃紺のスーツを着た、いかにも公務員然とした男性だった。

しかし見た目から受ける印象とは違い、物腰はやわらかで、話し方にも安心感があった。

公務員というと、事務的で冷たいといった印象が先に立つが、この男性にはそうだった、他人を拒絶するような壁は感じない。

僕を呼びに来た時には、不安そうな硬い声を出していた母は、高級そうな菓子折りの置かれたテーブルをはさんで男性と向かい合い、

口元に手を当てて笑っている。その姿から、緊張は微塵も感じられない。

「ああ、賢一さんですね？ 新田賢一さん。私、水無瀬市役所の環境課の係りの者で、菊池と申します」

僕の姿をみとめて、菊池と名乗った男性は立ち上がり、深々と一礼をした後、両手で名刺を差し出した。

つられて僕もおどおどとお辞儀を返しながら、それを受け取る。

見ると『水無瀬市役所環境課 菊池忠正きくちただまさ』とあり、市役所の電話番号、内線番号とともに、携帯の電話番号が書いてあった。

僕が母の隣に座るのを確認して、菊池さんも腰を下ろす。

「いやはや、突然お邪魔してしまってすみません。ところで、不躰ですみませんが賢一さん。お体の調子、如何ですか？どこか具合が悪いところはないでしょうか？」

「いえ……特には……」

「そうですね……それは良かったです。でも少し顔色が優れないようにも見えますけど、本当に大丈夫でしょうか？ もしやなにか、気をつかわれてはいませんか？」

「いえ……ご心配ありがとうございます。大丈夫です」

僕は内心面食らっていた。いきなり市役所からやってきて、体の調子はどうか？などと聞く菊池さんの考えが分からなかった。

「いや、それなら良かった！ ほっとしました。ああ申し訳ないです、肝心なことを申し上げておりませんで……今回は大変ご迷惑をおかけ致しまして、真に申し訳ありませんでした！ 何卒ご容赦いただけますよう、陳謝いたします！」

おもむろに立ち上がると、菊池さんは僕たち二人に向かって、ほとんど体を二つに折るように、深くお辞儀をした。

僕は、もちろん母も、分けもわからず、ただぼかんと、すみませんでしたと繰り返す菊池さんの姿を見ていた。

「今後はこのようなことが無いよう、当市役所としましても鋭意努力していきます所存ですので、どうか今回のことはお許しください

「！」  
そのまま放っておいたら土下座までしかねない菊池さんの様子に、僕は慌てて立ち上がった。

「菊池さん。もういいです……あの、別にあなたにそんなに謝られる筋合いの話でもないですし、顔を上げてください」

母は何か言いたそうな顔をしていたが、やはり僕と同じように状況がつかみきれないのか、黙って僕と菊池さんのやりとりを聞いている。

「とにかく腰を下ろしてください。謝罪の気持ちは十分に伝わりましたから。」

そもそも僕は、菊池さんにこんなにもお詫びされるような目には、なにもあっていないのだ。

ようやく腰を下ろした菊池さんは、心底ほっとしたように肩の力を抜いて、満面の笑みを浮かべて僕を見た。

「ありがとうございます。そう言っていただけだと、本当にありがたいです。なにしろ今も入院なさっている方もいらっしゃるものですから……心配しましたよ。賢一さんのこと」

事故を目撃した人の中には、そういう人もいただろう。確かにあれは……凄惨な事故だった。

今日の用事というのは、そういった事故を目の当たりにした人間への、心のケアのような、そんなものなのだろうか？

入院という不穏当な単語を聞いて、母が眉根を寄せ、どういふことなのかという視線を、僕に向けた。

僕は大丈夫という風に母に頷き返して、菊池さんに言った。

「あの、菊池さん。わざわざ市役所からお越しただいて感謝しますが、僕なら大丈夫です。なにも心配していただくことはありません。」

僕の言葉に菊池さんは大きく頷いた。

「なるほど、ご本人がそうおっしゃるのでしたら、本当に何の問題もないでしょう。安心しました」

ふうと大きく息を吐き出しながら菊池さんは続けた。

「何分結構大きな事故でしたからね、当方といたしましても調査が難航しまして。賢一さんのように事故に巻き込まれた方も、完全に把握しきれしていない状態でして。こうしてお詫びさせていただくのが遅れました。言い訳にもなりませんが……」

「え！？事故つて……どういことよ！賢一！？」

今まで黙っていた母が、弾かれたように僕の方を向く。

まずい……僕は言葉を失って黙り込んだ。

「ねえ賢一！事故つて……巻き込まれたってどういうことなの？母さんそんな話、一言も聞いてないわよ！？」

何も答えない僕の二の腕を掴む。予想外の力の強さに、僕はビクリと体を振るわせた。

突然豹変した母の様子に、菊池さんは慌てて腰を浮かせた。

「お母さん、落ち着いて下さい。まいったな……先程ちゃんと説明しておくんだった……すみません、ちゃんとお話しますから、聞いていただけませんか？」

事故の事は、できれば黙って起きたかった……けれども、こうなってしまうては無理だろう。

「大丈夫。母さん、僕はなんともないから」

僕の言葉をこれ幸いと、菊池さんが言葉を続ける。

「ええ、そうですね、賢一さんの言うとおりです！今日私がこちらにお邪魔させていただいたのも、“万が一”の事を考えてのことです、ご本人がこんなにしつかりとなさっているのだから、私が言うのもなんです、何も心配する必要はないと思います。お話から察するに、お母さんは事故のことをお知りになっっていたよう……賢一さんがおそらく事故の話をしているだろうと、勝手に思い込んでいた僕が軽率でした。結果として驚かせることになっ……てしまつて、申し訳ありません」

柔らかく諭すような声でいって、菊池さんはまた、テーブルに手を着いて頭を下げた。

それを見た母は、納得がいけない顔をしながらも、とりあえず口をつぐんで、菊池さんの方に向き直った。

「わかりました。お話を聞かせてください。それと……取り乱してしまつて……お恥ずかしいところをお見せしました、すみません」

「お母さんがお謝りになるなんてとんでもない！ 知らなければ当然のことです。いきなり息子さんが事故に巻き込まれたなんて聞いたら、だれでもそうなります。ご説明することをお許しただけなこと、感謝いたします。ご理解いただけるよう、順を追って説明させていただきます。といつても、さして複雑な話でもありませんから、すぐに把握していただけたと思います」

菊池さんは、あくまでゆっくりと、落ち着いた声でいった。

はい、お願いします、と小さく頷く母をみて、菊池さんはおもむろに話しはじめる。

「それでは、ご説明させていただきます。問題の事故が起きたのは、今から3日前になります。時間は13時20分頃、場所は中央2丁目の交差点です。信号を横断中の通行人が、交差点中央に位置するマンホールから、白い蒸気のようなものが噴出しているのを発見しました」

やはりそうだ。菊池さんは、勘違いをしている。

「その直後、交差点を吹く風に撒き散らされた白い蒸気 実際には、この水無瀬市直下に所々広がっているガス溜まりを処理している、ガスの破損箇所から漏れ出した、地下ガスだったので

それを吸い込んだ人々が、頭痛や眩暈、吐き気の症状などを訴え、その場に座り込むなどして、その内の数人が119番通報をしました。その通報を受けて、最寄の市中心部にある水無瀬中央総合病院より救急車、及び消防署からは消防車が出動、それから30分の間、十数件の救急通報がその交差点を中心とする、半径100m程のほぼ円形内の各所から相次ぎ、警察、消防、救急ともに、被害者の保護、救命措置活動を行いました」

間違いない。菊池さんは僕の事を、僕が目撃した交通事故の直前、もしくは直後に起きた別の事故、つまりはガス漏れ事故の被害者であると、どういう分けか勘違いしているのだ。

「こんなご時世ですから、一時はテロなどの最悪の事態も懸念されましたが、原因はすぐに排ガス管の破損と判明しました。しかし当初の混乱が尾を引いて、修理完了までに二時間という時間を要しまして、その間、付近一帯には、外出の禁止する放送が流れました。不幸中の幸いというべきか、ガス漏れ事故の被害者は最終的に、その通報区域の広さから見て少なく、事故発生直後にガスを吸い込んでしまった20名ほどに止まり、その被害自体も、頭痛、眩暈以上のものは、確認されておりません。ただ、賢一さんのようにこちらで把握しきれしていない方の数を含めると、もっと増える可能性はあるとは思いますが……」

「でも、被害のことですが……先程まだ入院されている方がいらつしやると、おっしゃっていませんでしたか？ それに……その地下ガスですか……その……後遺症とかそういう心配はないんでしょうか？」

「ああ……お母さん、ご心配はごもつともですが、そんな顔をなされなくても大丈夫ですよ。まずガス吸引後の、後遺症についてですが、これは心配ありません。地下ガスについては化学的分析が済んでいるのですが、長時間　この場合数時間程度という意味ですが　密閉された空間で、持続的に吸い込み続けなければ、心身ともに、後遺症が残る、などということはないことが、研究によって究明されています。」

「事故当時ガスが漏れていた時間は二時間ですが、場所は風通しの良い交差点ですし、事故現場の被害者の方の救命に関しては、発生から1時間後には、完全に終了していました。これは、どちらの条件にも当てはまりません。ああ……そうそう……私、ガスに関して詳しく書いてある広報紙を持っています。ええと……」

菊池さんは自分の足元に置かれた黒いカバンを、膝の上に引き上げ、ごそごそと中を探り始めた。

「あつた……これです」

そう言つて見開き一枚の、市の広報紙を取り出すと、テーブルの上に置いたそのの一角を、菊池さんは指差した。

『水無瀬だより』と銘打たれた新聞風の作りの広報紙だ。

「地方紙にも定期的に折り込まれていますので、ごらんになったこともあるかも知れません」

菊池さんの指の置かれた場所には、『水無瀬の地下ガスは、オレが処理する！』と、やけに強気なセリフを書かれた、顔の角ばつた、ごつい体をしたマスコットキャラクター？が描かれていた。鼻に絆創膏をつけたガキ大将風のそのキャラクターは、なぜかサッカーボールを抱えている。

「ガスコイン君です」

菊池さんは、訪ねもしないのにそのキャラクターの名前を教えてくださいました。

「……はあ」

その後続く記事は、そのガスコイン君が、地下ガスの性質について説明する、といった内容のものでした。

「差し上げます。ご興味がありませんでしたら、ご一読ください。それとも、もっと詳しくお知りになりたいようであれば、市のホームページに、更に詳細なガスに関する説明があります。そちらもご参照ください。もし閲覧環境に問題があれば、市役所にも、同内容の書かれた数ページ程の書籍もございます」

誰だ……このキャラにゴーサインを出したのは……

「話を続けさせていただきますね」と菊池さんはさらりと言った。

「ご入院されている、被害にあわれた方のことでしたね……  
プライバシーに関係するため、詳しい説明はいたしかねますが、今回の事故で病院にご入院なさっているのは、この方一名だけです。

その方は運悪く、短時間ながらも、多くガスを吸い込んでしまったようで、記憶に若干の混乱が見られるとのこと、念のため、市の方から申し入れて検査入院をしていたいております。けれど体の調子には、全く問題ありません。健康そのものです。記憶の混乱も、事故からの時間の経過で、すでにほぼ正常にもどっているようです。ただガスの被害というのは、直接目に見えるものではないので、あくまで“念のため”“万が一”のことを考えて、病院に留まっていたに過ぎません」

「本当に……大丈夫なんですか？」

母が心配そうな声で、改めて訪ねた。けれどその声色は、落ち着きを取り戻しつつある。

「はい、もちろんです。僕自身先方 今回の事故の一番の被害者と言えるでしょう その入院している方にお会いしてきました。

いやあ、ピンピンしていらっしやいましたよ。早く病院から退院したくて仕方ない様子でした。ちゃんとした検査の終わる2日後までは、なんとか我慢してくださいと宥めるのが大変だったくらいです。とにかくご自身のお体のため、ということ、ご納得していただきましたが……」

なるほど、ガス事故に関しては良く分かった。やはりこれは、僕には無関係な事故だ。

しかし。菊池さんの話を聞くにつれ、僕の中であの、新聞の事故続報を見たときに感じた違和感が、膨らんできていた。

3日前の午後一時過ぎ、確かに僕はあの交差点にいた。

そして 思い出したくもない、あの 交通事故を目撃した。

おそらく、菊池さんの語るガス事故が起きたのは、その直後の事だったのだろう。

菊池さんは、ガス事故の救命復旧作業には、2時間かかったと言っていたが、僕があのだ交差点に着いたときには、そんな様子はなかった。もし交通事故より前に、ガス事故が起きていたなら、その警察、消防、救命等関係者が、僕が交差点に着いた時点ですでに作業

を開始していたはずだ。

そんな人間は、あの時交差点にはいなかったし、外出をひかえる旨の放送が流れたそうだが、それも聞こえなかった。

僕だけじゃない。信号待ちをしていた人達にも、そんな様子は見受けられなかった。

それにもし　こんな考え方は・・・・嫌いだけど　もしガス事故が先に起きていたなら、あんな事故は起きなかったに違いない。信号無視をしたトラックは、事故現場の侵入規制のための検問かなにかで、止められていただろう。

そこまで想像して、はたと気付く。

おかしいじゃないか。

この2つの事故は、ほぼ同時刻に、全く同じ場所で起きているのだ。

僕が見た交通事故の前にガス漏れ事故があったことは、やはり考えられない。

交通事故前の交差点は、平静そのものだった。ガス事故作業関係者の姿はおるか、交通整理の人間一人の姿だっただけで見かけられなかったのだ。

でも。

交通事故がガス事故の前に起きたのだと考えても、同様の疑問が残る。

ほぼ同時刻、同場所で起こった2つの事故。

すつと、視界が遠のいていく感覚。

どちらの事故が先だったにしろ。

先にあった事故の関係者は、後に起こった事故の現場に、必ず、いたはずなのだ。

ガス事故が先なら、救命作業、原因調査、復旧作業の人間が。交通事故が先なら、やはり救命作業、消防、そして現場保存、検証のための警察関係者が。

仮に僕の考えが正しい　つまり交通事故の方が先に起きた

と仮定して考えてみよう。

交通事故が起き、その後ほとんどなくしてガス事故が起きた。

ならば　ガス事故発生当時、現場には、十数人ではすまない数の人間がいたはずだ。

大型トラックが交差点中央付近に止まり。

現場検証にあたる監察官。ドライバーからの事情聴取にあたる捜査員。トラックからの出火に備える消防車。

僕が現場を去った時にはちらほらだった気がする野次馬も、いくら人口の少ない地方都市だからといって、どんどん増えただろうし、それを押し留める警察官。二次的な事故を防ぐための交通規制。そして被害者救命のための救急車　。

後に起きたと仮定した、ガス事故の被害者は、緊急通報をする必要など、全くなかっただろう。

だって、事故が起きたその瞬間、その場にはなんとという偶然か、呼ぶべき緊急車両や人員が、すでに勢ぞろいしていたのだから。

『　それを吸い込んだ人々が、頭痛や眩暈、吐き気の症状などを訴え、その場に座り込むなどして、その内の数人が119番通報をしました。』

菊池さんの言葉が頭に甦る。

ありえないのだ。それは。

一日の内に、二つの事故を経験した人間は、必ずいなくてはいけない。

いやむしろ　。

僕は、交通事故の現場で、彼女の・・・・・・変わり果てた姿を前にして、どれほどの時間を過ごした？

目の前で事故が起きて、はいそうですか、と通り過ぎる人間が何人いる？

大抵の人間は、ショックで、興味本位で、動機は様々だろうが、その場に留まるのではないか？

むしろ　あの時間に交差点にいて、2つの事故を経験しない人

間の方が。

少ないのかもしれない？

世界が、時間が、ねじれてしまっているかのようだ。

そうだ、これではまるで。

「菊池さん……」

堪らず、僕は喘ぐように口を開いた。

「はい、何でしょう？」

菊池さんは、母がまた、元の平静を取り戻しつつあることに安堵したのか、笑顔で僕に答えた。

「菊池さんは……その、言いくいんですけど……話の腰を折ってしまつてすみません」

「何です？ いいですよ。おっしゃって下さい」

僕の唐突な言葉にも、菊池さんの柔らかな表情は崩れない。

「あの……菊池さんは、何か勘違いしてはいませんか？」

「はい？」

微かに上がる語尾。菊池さんの笑顔の中で、眉だけがひそめられる。

「僕、確かに3日前の1時頃、その交差点に居ました。渡つたすぐ先に、中央図書館がある交差点です。そうですね？」

「ええ、ありますね、図書館。僕も調べ物がある時は、よく利用させて貰つて……」

「そこで……確かに事故はありましたし、その現場に僕が居合わせたのも間違いありません。家族には、余計な心配をかけたくなかつたし、僕自身はかすり傷一つ負わなかつた訳ですから、話さなくてもいいだろうと思つて、黙っていたのですが……」

「賢一……」

不服そうに口を開きかける母を、手で制して続ける。

「菊池さんのお話が、僕が見た事故の事実と、ちよつと食い違つて  
るみたいなんで……菊池さんは、勘違いしてますよ。僕が  
居合わせたのは……ガス事故ではありません。菊池さんの

「ご説明なさったガス事故の……少し前にあったのだと、僕は思っているんですけど……僕が見たのは、交通事故です」とても。

「酷い……事故でした。それでショックを受けた僕は、多分すぐにその場を離れて、家に帰って来たんです。事故の後、到着した救急車の隊員さんに、すぐ病院に行くよう勧められた気はするんですけど、それも断って帰ってきました。」

とにかく、いろいろとショックで……なにも考えられなくて……そんなものですから、ガス事故が起きた時には、僕はそこに居ませんでした。とても近い時間に2つの事故は起きているようなので、それで菊池さんが、僕をガス事故の被害者だと、勘違いされているのだと思います。」

「こんな、謝ったり説明したりしていただいた後で言うのもなんですが、僕は菊池さんの言うガス事故とは、全くの無関係なんです。」  
頭の中に渦巻く疑念を払拭したくて、僕は一気に捲くし立てた。

「え？」

その話を聞いて菊池さんは、何とも言えないような、奇妙な表情になった。

「だって賢一さん……新田……賢一さんですよね？」

「とんちんかな質問をする。」

「……ちょっと待ってください。混乱……してま

す」  
銀縁の眼鏡を外して、胸ポケットから眼鏡拭きを取り出した菊池さんは、少しも曇っていないレンズを拭き始めた。ぶつぶつと、なにかを呟きながら、眼鏡を拭き続ける。考え事をするときのクセなのかもしれない。

「そうですね、賢一さんのおっしゃるとおり。私がこちらのお宅にお邪魔させていただいたのは、賢一さんが3日前のガス事故で、お体に変調をきたしていないかを、確認させていただくためでした。」

それはもう、問題なく果たせました。賢一さんは、健康そのものでいらつしやる。」

眼鏡の下にあった菊池さんの眼は、一見軽薄そうにも感じられる話し方から受ける印象とは違い、深い、思慮の色を湛えていた。さりとしてそれは、人を追い詰めるような類のものではなく、未発見の何かを求める、研究者のような眼差しだった。

「整理させてください」

その瞳のまま僕を見つめる菊池さんに、僕は無言で頷いた。

「3日前、交差点であったガス事故の現場に、賢一さんはいなかった。」

更に頷く。

「けれど、ほぼ同時刻、同所で別の事故が起きていた。その別の事故とは交通事故であり、おそらくガス事故の直前に起きたと思われるものである。」

頷く。矛盾もあるが、そうとしか、考えられない。

「そして賢一さんは、その交通事故の現場に居合わせた。だが、事故を目撃したことによるショックが大きく、とてもその場に留まることはできなかつた。だから到着した救急隊員の病院へ行ったらどうかという勧めも断り、すぐさまその場を後にし、帰路についた」

記憶の通りだ。

「故に、その後起こったと推察されるガス事故の現場にいることは有り得ない。と、こういう事ですね」

なんだ？

「なるほど」

そう言った後、菊池さんは、外していた眼鏡を掛けなおし、あの人を安心させる明け透けな笑顔を僕に向けた。

「賢一さんのおっしゃっていること、良く理解できました」

「そう……ですか」

「その上で、これは極々個人的な質問なのですが……あ、お答えいただきたくなければ、結構ですので、そうおっしゃって」

「ださいね？」

「どんな質問ですか？」

「賢一さんが目撃されたという事故。交通事故ということでしたが、それは、大きな事故だったのでしょうか？」

菊池さんは 交通事故のことを知らないのか。

「そうだったと、僕は思います」

「沢山の方が、被害に遭われたのですか？」

「いえ……そうではありません。僕の知る限り被害者は1人だけで……その意味ではありふれた事故と言えるのかも……知れません。でも」

菊池さんは、僕が口ごもるのを見ても、穏やかな表情を崩さず、我慢強くじつと、僕が再び口を開くのを待っていた。

「僕にとつては」

僕は、菊池さんには、知っておいて欲しかったのかも知れない。

彼女に何が起きたのかを。

いや、ごまかすべきではないだろう。

僕は、耐えられなかった。話がここに至るに、僕は彼女の事故を、黙って抱え込むことに耐えられなかった。

「本当に酷い事故でした」

これは、彼女の死を、汚す行為なのだろうか？

「お聞きしても？」

「事故の被害者は、中学生の女の子でした。事故は……の目の前で起きました。即死、だったと思います。彼女は 僕と同じ中学校に通う、同学年の女の子でした」

「……ああ……それは……さぞかし御辛かったですでしょう……」

菊池さんの眉が、ぎゅつとひそめられた。演技には、見えなかった。本当に辛そうだ。

「親しい方、だったのですか？」

「いえ……話したこともありません」

思い焦がれていた。

「だけど……とても印象的な、女の子でした」

特別だった。

その場に重い沈黙が下りた。

菊池さんも、さつきから口を開きたくしてしようがない素振りだった母さんも、押し黙ったまま、搾り出すように言っただけ、俯いた僕を見つめていた。

「賢一さん」

その空気を振り払うように、菊池さんが、何かを決意した口調で、僕に問いかけてきた。

「はい」

「そんな、お辛いだろっ話をしていただいて、ありがとうございます。よくぞお話し下さいました。それで、最後に一つだけ、お聞きしたいことがあります」

「なんででしょうか？」

「事故の被害者の方、同学年の方だとおっしゃいましたね。その方の お名前は？ 賢一さん、知っていますか？」

「なぜ」

そんなことを聞く。

「知っているのならば、教えてください。もしかしたら 本当にもしかしたら、ですけど。私の知っている方かも知れません」  
菊池さんが彼女の知り合い？ そうなのか？

だとしたら、どんな関係なのだろう？

「はい……彼女の名前は『若宮 加奈』と言います。……知ってるんですか？」

その名前を聞いて、菊池さんはぎゅっと目を閉じ、眼鏡をずらして、眉間を揉み解した。

「それは……まいったな……困った……知っているんだ。」

「菊池さんのご親戚、とかですか？ もしかして」

「いいえ……その……何と言ったらいいか……」

菊池さんは言い辛そうに口ごもり、何かを熟考するように、しきりに小さく唸ったり、軽く首を捻ったりした後。

「賢一さんにとって、良い知らせだと信じます」  
そう言った。

「今から私が話すことは、紛れもない事実です。賢一さんは混乱するかも知れませんが、冷静に聞いてください」

漠然とした不安。僕の中で、違和感が急激に膨らんでいく。

「賢一さんが、事故に遭って亡くなったとおっしゃってる若宮さん、若宮 加奈」さん。彼女ね 生きてます」

後頭部を、いきなり思い切り殴られたようだった。

まるでそこにあるかのように、事故の光景が脳裏に映し出される。血と骨と、こびりついた肉の山。

ジリジリと全身を焼く、夏の日差し。

誰かの悲鳴。

流れ出した血液と、焦げたゴムの匂い。

小山の山頂に、捧げられるように置かれた、見たこともない程優しげに微笑む。

彼女の顔。

口の端から血の泡を滴らせた……顔。

“アレ”で、生きていたと言うのか!?

「ひど……」

吐き気がこみ上げて、僕は体をくの字に折り曲げた。

「賢一!?!」

悲痛な母の叫び。背中に当てられた手が、がくがくと震えていた。

「大丈夫です、賢一さん。落ち着いて」

「何を言ってるんですか! 大丈夫なわけないでしょう!?!」

母の一喝に、菊池さんは一瞬怯んだようだったが、すぐさま言葉を続けた。

「お母さんも落ち着いてください。大事なことです」

「菊池さん！」

尚も続けようとする菊池さんを咎める母。

「いいから、お聞きなさい！」

終始柔らかな口調だった菊池さんの鋭い一言に、母も一瞬押し黙った。

その機を逃さず、菊池さんは話続ける。

ふいに 違和感の正体が、僕の頭の中で明文化された。

「いいですか賢一さん。3日前、交差点で起きた事故はガス事故です」

まるで。

「その前にも後にも、賢一さんがおっしゃるような交通事故など、起きてはいないんです」

そつだ、まるで、交通事故なんて起きていないみたいじゃないか。テレビも、新聞も、みんな。

母は、何かを言おうとしたままの姿勢で、固まっている。

「私はその交通事故のことを知らないだけだと思われるかもしれませんが、それは違います。交通事故など起きなかったという決定的な裏づけがあるのです。賢一さんのお話を聞いて、確信しました。

賢一さんが事故に遭われたという若宮さん。彼女は交通事故になど遭ってはいません。事故に遭って即死どころか、外傷はかすり傷一つない」

吐き気を堪えながら、僕は息をするのも忘れて、菊池さんの話に聞き入った。

「確かに賢一さんの言うとおり、若宮さんは事故に遭われた。しかしそれは交通事故などではない。私が先ほどから説明している“ガス事故”の被害に遭われたのです。私、先ほど話しましたよね？ ガス事故に遭われて、しぶしぶ検査入院されてる元気な方の話。

その方の名前が「若宮 加奈」なんです。同姓同名の別人という可能性が無いわけではありませんが、それはほとんど考えられない

のです。なぜなら私が、若宮さんの所に、入院の詳しいご説明を兼ねたお見舞いに行つて来たのは、ほんのついさっきのことで、そしてその病室で、彼女はこう言ったのです。『ガス事故の現場で、「新田 賢一」という同じ学校の生徒を見たが、彼は無事なのか?』と」

「彼女が……生きています」

彼女が僕の名前を知っていた?

こんな状況でなければ、飛び上がって喜んでいたことだろう。けれど僕には、重くのしかかる別の不安があった。

じゃあ、僕が見たのは、一体……。

「はい、それはもう、お元気でらっしゃいます。私どもの方では、賢一さんが事故被害に遭われたかどうか未確認でしたので、それで早速伺わせていただいた次第なのです。若宮さんから、賢一さんの名前を聞いていなかったら、私は今、こちらに居ないでしょう」  
交通事故は無かった? 彼女は傷一つなく、無事に 生きています。

「若宮さんの検査はあと2日続きますが、きっとどこにも異常は認められないでしょう。若宮さんが健康に問題があると言つなら、私の働く部署には、生ける屍が溢れ返っているということになります」  
菊池さんが冗談めかして笑つと、緊張していた場の雰囲気、僅かにやわらいだ。

彼女は生きている 良かった。

「そこで、私から、ご提案があるのですが」

菊池さんの声は、すっかりもとの柔らかさを取り戻していた。

「賢一さんと若宮さんは、お知り合いのようだし。ついぞと云つてはなんです……どうです、賢一さんも、若宮さんのお見舞いがたら、病院でちよつとした検査を受けてみては」

無意識に表情をゆがめてしまっていたのだらう。僕の表情に、菊池さんは、とりなすように言葉を続けた。

「いやいや、検査に関しては、別に強制という訳ではありません。

ご安心ください。ただ、落ち着いて考えてみてくださいませんか。若宮さんは、ガス事故に遭われた。当然、その現場にいらっしやっただ賢一さんも、同じように、ガス事故の被害に遭われているはずですよ。おそらく、その時に多くのガスを吸い込まれたでしょう……・……言いにくいことですが、ありもしない交通事故の幻覚を……・……見てしまう程にです。

交通事故のお話をする賢一さんのお姿、本当にお辛そうでした。きつと詳細にその光景を覚えておいでになるのでしょうか……・……けれど、ご自分でも少し調べれば分かることでしょうが、交通事故は、現実にはありませんでした。賢一さんの記憶に残る交通事故の光景は、すべて、ガス事故に遭い、期せずしてガスを吸い込んでしまった結果、意図せず見てしまった……・……幻覚にすぎません。なにも、賢一さんがおかしなことを言っている、とは思いません。噴出した地下ガスというのは、そういった幻覚を、吸い込んだものに見せてしまう性質を、確かにもっているのですから。

脅かすつもりはありません。ですけど、体の調子に異変がなかったとしても、無自覚なところに、なにか問題が発生していないとも限らない」

例えば 頭の中、とか。

菊池さんの心配そうな言葉の中に、僕は底意地悪くも、言外の二ユアンスを感じていた。

そうしてしまう心境の裏には、苛立ちがあった。

うまく線引きができない。

幻覚、だったのだろうか？ 菊池さんは嘘をついているようには思えない。そもそも、

僕にそんな嘘について、菊池さんが得をすることは、なにもない。

本当のこと、なのだろう。

それでも、頭の中では菊池さんの話を十分に理解しながらも、とてもすぐに納得できることではなかった。

あの信号待ちの人々も、黒々とタイヤ痕を残して停止したトラッ

クも、無残な 彼女の姿も。

全てが幻覚だったというのか？

いや、部分的には、現実起きたことも含まれているはずだ。実際彼女は、菊池さんの話では、事故現場にいて僕を見たと言っているのだ。

僕も確かに、彼女があの場合に居たことを知っている。

ならどこまでが現実で どこからが幻覚なのか。

その線引きができない。とても区別できそうにない。

僕の中では、僕の見ただ全てが現実に思えて、幻覚との境目など見当もつかない。

けれど、交通事故にあったあの彼女の姿だけは、彼女が怪我一つないという話を信じるかぎり、絶対に幻覚であるのだ。

幻覚と言われる僕の記憶のなかで、一際鮮明に残っている光景なのに、それが幻覚だなんて。

「今すぐこの場でどうするかを決めることはありませんけど、真面目に考えてみてください。それも、できることならなるべく早い方が賢一さんのためだと思います。費用に関しては、市から全面的に出ますから、心配いりませんよ。」

あと、老婆心ながら一つ助言させていただくと、賢一さんが検査を受けるにしろ、受けないにしろ、若宮さんのお見舞いには、ぜひ一度は行くべきだと思いますけどね。相当心配してらっしゃいますよ？ 賢一さんのこと。いいなあ……綺麗な子じゃないですか、彼女」

「そんな」

たい。会いたい。

彼女は、生きている。彼女と話が、できる。

僕の記憶が幻覚だろうがなかるうが、そんなことはどうでもいいことじゃないか。

とにかく彼女が無事で 良かった。それだけで十分だろう。

あの、以前から僕を捕らえ続けている衝動が、会いたいと思った

瞬間に、間欠泉のように湧き上がり、思考を占拠した。

あの時、横断歩道の信号待ちをしているときに、彼女が僕に気付いたと感じたのは、幻覚なんかじゃなかった。

その上僕の名前を知っていて、体の心配までしてくれていたなんて。

検査を受けるつもりはないけど……病院に行ってみよう。彼女と会って……話をしよう。

なかったはずの　もう一度。

言えるはずのなかった言葉が……言えるのだ。

「はじめまして、こんにちは」

こんなに嬉しいことはないじゃないか。

自分の記憶が幻覚であったことに、僕は、逆に感謝するべきだ。

「あの、病室は……」

勢い込んだ内心とは裏腹に、問いかける声は何故か小さくなった。

「はい？」

聞き取れなかったのか、菊池さんがこちらに身を乗り出す。僕は逆になんだか身を引いてしまった。

「若宮さんの、病室……です。番号とかそういうの、あるんですよね？」

「ああ」

ぼんと一つ膝を打って、菊池さんは、何が嬉しいのか満面の笑顔になった。

「ああ　内科の入院患者用病棟で28号室です。面会時間は午前11～午後4時まで。市も奮発したもんで個室ですから、他の患者さんを気にせずゆっくり話せますよ。

おっと　奮発云々は聞かなかったことにしてください。余計なことでした。これだからいつも……叱られるんだよねあ……」

頭を掻きながら首を竦める菊池さんの様子に、僕も母も小さく笑った。

「でも、今日はもう時間に余裕がなさそうですね……突然だと先方も驚かれるかもしれませんから、僕がそれとなく伝えておきますよ。明日、明後日あたり、賢一さんが見えられるかも……・……ってね。この後まだ、病院に出向く用件もありますから、そのついでに」

そう言っ「今日は色々と失礼しました」と何度も頭を下げながら、菊池さんは我が家を後にした。

## 第4話

市役所から来た菊池さんのおかげで、自分の中で、今回の事故について收拾がつきそうだった。

交通事故は、僕の見ただけだった。

ガス事故の現場に居合わせた僕は、そのときガスを吸い込み、交通事故の幻覚をみたのだ。

そう思うと、自分が現実だと確信していたはずの交通事故の記憶も、やけに疑わしくなってくる。

もしかしたらと、思う。

あの作り出された幻覚の中でも、特に強く覚えていることの一つである、辺りに漂っていた、トラックのタイヤの焦げた匂い。

あれは実は、噴出したガスの匂いだったのではないだろうか？

そう　　なのかもしれない。

一家3人そろった夜の食事は、普段から比べると、とても豪華なものだった。

母なりに僕に元気を出して欲しいという、気持ちの表れだったのだろう。

全く事情を知らなかった母は、菊池さんの話を聞いてどれほど驚いたことだろう。

仕事で疲れた父に気をつかってか、夕食の席ではそのことは、話題に上がらなかった。

もちろん、僕も普段通りの態度で、夕食をとった。

母さん、僕は大丈夫。

そんな思いを込めて、僕はむしろ、いつもより量を多く食べた。

食事をとっている最中も、頭の中は彼女と会うことで一杯だった。期待と不安がごちゃごちゃに入り混じった、複雑な気分だったけれど、意外にも食は進んだ。

彼女、若宮 加奈の病室の前に立って、僕は大きく深呼吸をした。扉の前まで案内してくれた、若い看護師の女性が、くすりと笑いを漏らす。

「緊張してるの？ 顔、強張ってるわよ。ほら、患者さんのお見舞いなんでしょう？ もっと笑顔笑顔」

その言葉に笑顔を返したつもりだったが、自分でもまったくうまく笑えていないのが分かった。

途中の花屋で買った、持ちなれない程の大きな花束を抱え、僕は白く塗られたスチール製の扉を見つめた。

この向こうに、彼女が居る。

「若宮さん、起きてますか？ お見舞いの方が見えてますよ」

看護師のノックの音に、部屋の中で、動く気配があった。

「誰、ですか？」

落ち着いていて通りはいいが、硬く、隔絶した感じのする、そっけない声だった。

僕はその時、自分が彼女の声を間近に聞くのが初めてなことに気付いた。

こんな、声だったんだ。

僕はその声に身震いした。

本当に、生きていたんだ。

菊池さんに事実を聞き、こうやって病室の前まで案内されて尚、僕は心のどこかで思っていた。

僕の見た事故は、幻覚などではなく、彼女が無事だったという話こそが、僕の願望から生まれた幻なのではないか。

「新田 賢一さんとおっしゃるそうよ」

ドアの向こうが、急に慌しくなったようだった。

「す、少し……待ってください」

取り澄ました風を装った声だったが、明らかに切迫した調子が混じっている。

「慌ててる慌ててる……」

看護師は両手に持ったバインダーを口元に当てて、小さく肩を震わせていた。

何か、意地悪そうな人だなあ……。

けれど僕には、それを誰何している余裕は無かった。ついに。

この一年間、思いを募らせた彼女と、2人きりで話す機会が。まさかそれが病院の個室になるとは、夢にも思わなかったけれど。彼女は急な訪問を、迷惑に思わなかっただろうか？

病院の案内所で自分の名前と彼女へのお見舞いの用件を告げると、すぐにここに案内されたぐらいだから、菊池さんはちゃんと約束を守ってくれていたようだ。

彼女にも、僕が病室を訪れることが伝わっているとは思っただけど。

ドアの前に看護師と立ち、5分程が経とうとしていた。

気まずい。

一体何をしているのだろうか？

ドアの前で手持ち無沙汰に過ごす5分は、存外に長かった。

「女の子にはね、色々あるのよ」

そんな僕の様子を察してか、看護師が話しかけてきた。

「でも、安心した」

なんだろう？ 苦笑、なんだろうか。看護師の顔には微妙な表情が浮かんでいる。

「安心、ですか？」

「もう少し！ すぐですから！」

一人ごちるように呟く看護師に問い返したとき、部屋の中からほとんと悲鳴に近い声が聞こえてきた。

「ええ」

小さなため息。看護師は、彼女の病室のドアノブの辺りを見つめたまま続けた。

「ひどい事故、だったみたいだね。外傷はなかったけど、若宮さん、ここに来てからずっと塞ぎ込んでいたから……だから彼女のこういふ普通の女の子みたいなどこ、見たことなかったからね……」

僕は何も言えなかった。

看護師は知らないのだろうか、僕もその事故に遭っているのだ。けれど僕には、その事故の記憶が無い。

彼女が事故によってどんな被害を被ったのか、僕はその場に居合わせながらも、全く覚えていないのだ。

なんだか　不甲斐ない。

菊池さんは、彼女がガスを吸い込んだ影響で、記憶が混濁していると言っていたけれど、彼女もまた僕と似たような感じなのだろうか。それとももっと明確に、事故のことを覚えていたりするのだろうか。

自分がなんだかとても、無責任な人間であるような気分になる。

ふと、不安がこみ上げてくる。

これから彼女と話すことになる。当然その話題は、主に事故のことになるだろう。

僕と彼女に共通の話題といえば、その事故の話以外にない。

学校の話題があるといえればあるが、先日の事故以上のインパクトは持ち得ない。

そうなった時、僕は何を話したらいいのだろうか。

「お待たせしました。ど、どうぞ」

僕の考えがまとまらないうちに、彼女の声がした。

「入りますね」

看護師がドアノブに手をかける。

いよいよ、だ。

ゆっくりと開いていくドア。

柔らかい照明を照り返す白い壁。

同じ色の床。電動式ベッドの足が見え、これも同色の染み一つないシーツ、そして上掛けが見え。

背もたれになるように起こされたベッドに、布団を腰まで掛けて、薄青い病院着に身を包んだ彼女が、座っていた。

うつむいた顔を、長く真っ直ぐに伸びた黒髪が隠している。

普段は澄んだ泉の水のように透明感のある白い肌は　今、黒髪の間から覗く耳まで、紅い。

僕はその姿を見て、あっけにとられた。

「あらあら……」

含みのある調子の看護師の声も、僕には遠かった。

「しっかりしなさいね。彼氏」

僕は病室に入ってすぐの場所で、呆然と立ち尽くした。

どうしたら。

「若宮さん、午後の検査の時間、忘れないでね。それじゃ……  
・ごゆっくり」

脇をすりぬけるように出て行く看護師に、去り際、強めに背中を叩かれたが、何も感じない。

彼女は、看護師が出て行った後も、何も言わずただうつむいていた。

僕は、混乱していた。

見たところ菊池さんの言っていたとおり、外傷は全く無さそうだった。

僕が良く見知った彼女と、寸分も変わらない。

僕は、混乱していた。

いや、狼狽していたと言い換えてもいい。

頭のなかで繰り返されたのは、一つの言葉。

僕は、どうしてしまったのだ。

望んだはずの再会なのに。

何も変わりのない彼女のはずなのに。

僕は、あれ程までに会いたい、話をしたいと願った彼女を前にして。

何も、感じなかった。

僕を高揚させ、焦がれさせ、どうしようもなく突き動かし続けたあの熱情は、今や跡形も無く、消え去っていた。

本当に何も感じない。

まるで通りですれ違う通行人を見るように。

電車内で偶然隣り合っただけの人間のように。

僕にとって“そこに居る”という認識以外の意味を持たない人間に、彼女は変わっていた。

いや、彼女が変わったのではない。

おそらく僕が、僕の内面にあるどこかが、変わってしまったのだ。

理由が分からない。少しも、分からない。

まさか、これは事故の影響なのか？

こんな事が あるのか。

ある人物に対する心の持ちようが、訳も無く、突然に変わってしまふなどということが。

なぜ。

その疑問の裏に、扉の隙間から覗き込む目のように見えているのは 恐怖だ。

怖い。

何かがおかしい。

先日の事故以来、何かが食い違い始めている気がする。

なにもかもが唐突で、現実が、僕だけをおいてけぼりにしていく。交通事故など無かったという事実。

好きだったはずの女の子に、なんの感情も持たなくなったという事実。

然るべき過程の後にやってくる、一つの区切りの意味での“結末”としてはありえるのかも知れないけれど、そのどちらも唐突に過ぎるではないか。

世界という名の映画館で、僕の見ている映画の内容だけが、突然に前触れなく差し替えられてしまったかのような。

「新田君」

出し抜けに話しかけられて、僕は瘡のように体を振るわせた。

視界が焦点を結び、彼女をはつきりと映し出す。

彼女はいつの間にか顔を上げていた。

真っ直ぐに僕を見つめている。心なしか目が潤んでいる気がする。薄く開いた唇から、白く濡れ光る小さな前歯が、微かに覗いていた。

何かを言いかけたまま止まってしまった弱々しげな口元にも、僕は何の感慨も抱けない。

「お見舞い、来てくれて……ありがとうございます……と……」

必死さの伝わってくるその言葉は、小さくしぼんで、聞こえなくなつた。

再びうつむいた彼女のうなじから黒髪が分かれ落ちる。首筋も、熟れたほおづきのような色に染まっていた。

学校で伝え聞いた、快活で強気な、時に切り捨てるような鋭さを持った彼女の話し振りとは、全く違う印象だった。

僕はこんな彼女の姿も見てみたいと望んだのではなかったかなぜ。

僕の心はこんなにも凧いでいる。

あまりにも不自然だ。

何度も思い描いたはずの二人きりの場面。それはこれ以上望むべくも無いほど、目の前に実現しているのに。

もっと舞い上がったたり、おたついたりしてもいいはずなのに。

「体の調子、どう？」

落ち着いた、冷徹とさえ言える声が出た。

違和感。

まるでショーウィンドウ越しに、マネキンに話しかけているよう

な馬鹿馬鹿しさを伴っている。

「あ うん、大丈夫……驚かないんだね。新田君」  
「何を？」

「……名前、私を知ってたこと。間違ってたら悪いんだけど、こうして話すの、初めてじゃない？」

そこまで話してようやく顔を上げてこちらを向いた彼女の頬は、  
焚き火のような赤を灯していた。

「うん。初めてだね」

「そうだよね……本当、落ち着いてるんだ、新田君。私は  
今……ちよつと緊張してる」

僕だつて緊張 してた。このドアの前までは。

「若宮さん。事故、大変だったね。でも」

元気そうで 元気そうで？

頭の中にあの幻覚が甦る。

首から上以外、解剖される時に誤って傷つけられた、裏返った力  
エルのように、完全に損壊してしまった、彼女。

元気そうで？

「 検査、大変そうだね」

「ほんと、イヤになる」

先程から、彼女は何かおかしいのか、笑顔のままだ。

「もつども悪くなんかないのにね、私」

そう思わない？同意を求めるように僕に向けられた笑顔に慄然と  
する。

「でも先生はちゃんと検査しなさいって言うんだ。 ガス事故だ  
から」

僕は、見たことがある。この、笑顔を。

「そんなこと言われると、ちよつと怖いよね」

供えられた、笑顔。

何に、あるいは誰に向けられたのか知りたかった、やさしい、親  
しげで、明け透けな笑顔。

僕の心の中でなにかがピクリと反応したが、それきりだった。傲慢にも思う。

もっと早く、この笑顔に会えていたなら。胸中には、細波すらも立たず。水面に望み通りの気泡が浮かぶのを、待てども来たらず。

「怖い……って言えばね」

彼女の顔から、さっと笑みが消えたことにすら、何の心の動きもない。

「私、事故の記憶が……曖昧なんだ」

「どういうこと？」

もっとも僕の気持ちを揺るがせるのが、彼女のこんな言葉なのが、何故か悔しかった。

「私ね、事故にあった日 4日前らしいんだけど 図書館に行

こうとしてた。塾の課題、やろうと思ってね……それで途中の十字路で信号待ちをした時、見つけたの」

彼女はとても大切なものを眺めるように目を細めて、あの笑顔に戻った。

「あなたを」

まるで、遠く隔たってしまった何かを手繰り寄せるように。

あなた、という大人びた表現は紡がれた。

「変なこと……言うね。今度いつこうして会えるかも分からないから、変だけど、言うておくことにする」

何を？

「私、その時、新田君と目が合った気がした。すぐ逸らしちゃったけど……前からこんなこと……結構なかつた？ 気のせい？」

「あつた。その日も、確かにあつたよ」

考えるまでもなく反射的に答えが出た。

何度も、何度も、それこそ自分では数え切れない程に。微かな視線の重なりだけは、毎日と言っていいくらい。

「そう　うれしい」

彼女の顔が不意に歪む。ほとんど泣き顔みたいに。

「うれしい」

彼女は繰り返した。

初めてだった。今まで見たこともない、新しい笑顔。

そして気付いた。

ああ　これは、あの笑顔の、先にある笑顔なのか。

それを見た僕の中で、いままで少しも揺るがなかった心の平静が、突然に崩れた。

瞬間、衝撃。

心臓の中で爆薬が破裂したみたいだ。

濁流となった血が、全身の血管の末端まで押し寄せ、岸壁に打ちよせる荒波のように、自分でそれが感じ取れるほどに、物理的な衝撃をもって弾け散った。

何が起きた？

今まで経験したどんなものにも比べるべくもない、圧倒的な恍惚。目の前にある彼女の姿以外の全てが、霧のように輪郭を失い、遠く、彼方へと過ぎ去っていく。

どこかで聞いたことのある台詞。

『存在とはまるで、視界の隅を過ぎる、最後の神のようだ』と誰かが言った。

それは違った。

彼女は、味気ない薄青の病院着を着て、こんなにも目の前に“存在”していた。

やっとそれを、実感した。

漲る血潮に反して、くず折れそうな膝頭。

何なのだろうか、これは？

うれしい。

彼女が生きていてくれて、うれしい。

怪我がなくて、無事で、頬が紅くて、意味なく両手の指を絡ませ

て、伏し目がちで、そうして幸せそうに笑って　うれしい。

初めて心底、そう思うことができた。

菊池さんから彼女の無事を聞いて思った。

良かった、と。

今はこう思える。

うれしい、と。

より利己的で、わがままで、暴力的とすら言える言葉。

でもこの時の意味は、全く違うものだ。

持ちえたことのない感情に戸惑いながらも、今度は、持て余すこととはなかった。

決して不快な感じはない。

「ごちゃごちゃした感情の配線の中で、クリアな導線が、一本、浮かんでいて　。」

「僕もうれしい　とても」

その内に流れている言葉は、たやすく汲み出すことができた。

ぴくりともしなかった顔の筋肉が、思い出したように自然に笑みの形をとっていくのが、自分でも分かった。

僕の言葉を聞いて、泣き顔みたいな彼女の笑顔は、本当に泣き顔になった。

言葉はなくて、顔を覆う両掌の間から、しゃくり上げるような嗚咽が漏れる。

まるで童女のようなみもふたもない泣き声。

けれど、泣き崩れた彼女の表情には、決して不幸な感じはしなかった。

好ましい感情の発露に、僕は吸い寄せられるように、ベッド脇に置かれた丸椅子に座った。

彼女の片手が顔を離れ、ベッドの上を、何かを求めるように彷徨う。

僕がその手をそっと握ると、細く柔らかかな、節目を感じさせない指が、けれど食い込む程に強く、握り返してきた。

そこには、体温よりも高い、涙の温度があった。

彼女が泣き止むまで、僕はその横顔を見つめ続けた。  
止め処なく流れ続ける涙で、顔をぐちゃぐちゃにした彼女。  
それに気付いた彼女は、恥ずかしそうに顔を背けたが、そんな仕草も、僕にはとても大切なものに思えた。

泣き止んだ彼女は、喜びと戸惑いの混じった微妙な表情で、僕の方を見ないまま中空を見上げた。

瞳はまだ、涙に濡れている。長い睫毛の上に重そうに乗った、涙の珠が可愛らしい。

戸惑っているのは僕も同じだった。

病室に入る前の胸の高鳴り。

彼女を目にしての無感動。

そして今は、新たな経験したことのない感情の只中にいる。  
煮立った湖に浮かぶ氷塊のような感情の名前には、予想がついていた。

彼女が好きだと迷いなく思える。

きつとこれが、これこそが、恋というものなのだろう。

誰から言われるでもなく、風の香りの中に四季を見出すように、自然とそう思えた。

「ああ……だめだなあ……私」

彼女はふうつと小さく、熱っぽい息を吐き出した。

「泣くとか、そんなつもりじゃなかったのになあ……」

恥じ入るように言って細い肩を縮こませると、小さな子供のよう  
にすら見える。

「でもいいや……うれしいから」

何かを吹っ切るように言った彼女の笑顔が、輝きを増したようだった。

僕もそう思う。ちっとも恥ずかしがることなんてない。

彼女がこんなに表情の豊かな少女である事を、僕は知らなかった。

学校内での彼女が、暗かった訳ではない。むしろ活発で明るいと  
言われる部類に入っただろう。

ただ、何事にもさばさばとした態度の彼女は、時に“冷たい”と  
評される時もあった。

なまじ容姿が整っていて、男子生徒の人気が高かったために、特  
に女子生徒の間での評判は、あまり良くはなかった。それを気にす  
る風でもない彼女の態度も、悪感情を煽っただろう。

故に学校での彼女の顔は、それらノイズを遮断する能力を持った  
“作られた顔”になっていたのに違いない。

少し想像してみれば、そんなある種の警戒心に満ちた顔が、表情  
豊かであるうはずもないのだ。

ならば今は　こんなにも感情を表に出し、ともすればそれに振り  
回され続けているように見える今は　とても安心していてくれて  
いる、ということなのだろうか。

「新田君」

「何？」

涙の余韻を感じさせない真面目な表情に戻って、彼女は僕の方に  
向き直った。

その視線にちょっと居まいを正してしまう。

「私、自分が変な子だって知ってる」

そういうこと言うのは、確かに少し変かも。

「学校で私の話とか聞いたことない・・・かな。いつもつん  
けんしてて、クラスでの評判も良くないみたいなお話」

僕は無言で首を横に振った。

「私ね、ちょっとクラスで浮いちゃってて・・・別に特別み  
んなに冷たくしたりしたってわけじゃなかった。ただどこに行くに  
も一緒とか、答えが分かりきってる問題にうじうじ一緒に悩んだり  
とか、そういうことがどこか煩わしくって、そんなことはかりして  
いる周りの子達から遠ざかっていったっていうのは、あったと思う」

僕を見た、彼女の印象そのままだ。

「私は私で、勉強だつて学校の当番や何かだつてちゃんとこなしていたのだから、誰に遠慮することも無いって思ってた。女の子からの相談事も、私が思うそのままのことを、真剣に答えていたつもりだった。でも、それが良くなかつたみたい……………」

微かに曇る表情。

「あまり女の子達は私に話しかけてこなくなつて、必然的に男子とばかり話すようになった。彼女達はそれも気に入らなかつたみたい。男にばかり媚を売ってる嫌な子みたいな話になって……………」  
「ちゃんと話してるところを聞いてれば、それが自分達と話す時とにも変わらない態度だつて気付くはずなのに……………」  
「でも、そんなこと関係なかつた。ただ男子と話しているというだけで、私の女の子の間での評判はどんどん落ちていった。」

でも、それでもどうでも良かつたんだ。学校での評判なんて。そんなことで一々態度を変えてたら、自分がどんな人間なのか忘れてしまふものだもの」

彼女はそう言つて自嘲気味に笑つた。

「それが急に気になりだしたの。視線が　　なんだか気になる人ができて。その人がクラスの女の子と話しているのを見かけることがあつて」

彼女は我慢できないといった風に俯いた。髪がゆれて、甘い仄かな匂いが、僕の鼻先をくすぐつた。

「なんだろう、何話してるんだろう。もしかして私のことかな、悪口聞かれたりしたらやだなつて、何でも無い風にしながら、内心どきどきしてた。馬鹿みたいだけど……………」  
「もし私の話をしてい  
るのなら、クラスでの私の評判を聞いたりしてがっかりとか、嫌なやつだとか思われたりしていたらやだなつて……………」

紅い。彼女はすぐに紅くなる。

「それでやつと、今までの彼女達の気持ちか……………」  
「何でもないことにあたふたしてた女の子達の気持ちか……………」  
「少しだけど分かつた気がした。自分が言つていたことを思い出して、ちよっ

ときつい言い方もあったかなって……反省……し  
た。でもだからって、じゃあ今から仲良くしましょって言うわけ  
にもいなくて……だってそんなことしたら、本当に男子  
の評判だけ気にしてる子になってしまっしょうか？」

「だからいいかなって思ってた。そういう機会がなくても、しょう  
がないかなって。私、こんな子だから友達だって少ないし……  
・というより一人しか……いないし。ましてやその、あの  
こ、こっこ」

どもりすぎ。にわとり？

彼女はいつの間にか勝手に窮地に立っていた。額にじわりと汗が  
滲む。

はじめて見た、彼女の汗。夏の日差しの下でも、気付かない程だ  
ったのに。こんなに動揺して。

「その、こっこっこ」  
「養鶏場？」

どもる彼女、かしまる僕。変な画。

自然と、何のてらいもなく。

「僕は若宮さんのこと、好きだ」  
言葉が出た。

「こー？」  
彼女は顔を跳ね上げるようにして、僕を見た。もう卵はつきたみ  
たい。代わりに絶句。

にしても……“こ”って……。

「違う……その！ 違うわ！ えーとつまり……  
私はその……途中忘れたけど……結局は、新田君  
は、私のこと、どう思っているのかなって、それとなく知りたかっ  
ただけです！」

「だから僕は、若宮さんのこと好きだって」  
今度は真っ直ぐ彼女の目を見て。

「あー！」

再び絶句。彼女、頭から湯気が出そうなほど赤面。そして硬直、冷や汗。なんか楽しい。

けれどもこちらも照れられると、自分まで恥ずかしくなってくるから不思議だ。

そう思った途端に、頬が急激に熱をもっていくのが分かる。

「あ」

気付かれたらしい。

「新田君は、時限式なんだね」

何それ、爆弾？

言うてから、しまった、という顔をして俯く彼女。口元から、くーっという変な声が漏れている。

その姿に、つい笑いが漏れた。

自分でもおかしいと思っていたのか、彼女もつられて肩を揺らす。そうなるともう止まらない。

僕らは、しばらく笑いあった。

不安や戸惑いは、もう無かった。自然と笑いがこみ上げてきて、ただ、楽しかった。

幸せだと感じた。

これが恋愛なのだ。

好きな人と手を取り合い、笑い合う。

そういう形の幸せがあるのだと、僕は初めて知った。

「私も、新田君のこと、気になってた。いつからかは分からないけど、何度も視線が合うことがあって、いつの間にか……新田君のことを意識するようになってた……ちょっと話しをしてみたかったけど、さっきも話した通り、私クラスでそんな感じだから、新田君にも迷惑かなくて、きつかけもなかったし、自分から男の子に話しかけたことなんて無かったから……恥ずかしくて。運良く目が合っても、すぐ逸らしちゃって」

彼女の幸せそうな声。

「この前、事故の時ね……気付いたんだ。新田君と信号で

目が合つて、慌てて目を逸らした後、私すごく無表情だった。多分  
機嫌が悪く見えるくらい露骨に。だつて目が合っただけでこんなに  
も自分の感情が揺さぶられているのが怖くて……なのになら  
れしくてつい、にやけそうになつちゃうのを必死で我慢して……  
・・自分は何でこんなことしてるんだらうつて。それで 分かっ  
た」

彼女の幸せそうな瞳。

「私、新田君のこと、好きなんだつて」

交わした視線よりも、つながれた手よりも。

「ありがとう。若宮さん」

心が通い合ったことに。

僕は話した。

彼女を見つめるだけだった一年。もっと早く話しかけていれば普  
通に会話できていただらうこと。

学校のこと。家族のこと。友人のこと。

それらを今この場で、遅れてしまった分全てを、取り戻してしま  
おうとするかのように、熱心にお互いのことを語り合った。

「で、その子、陽子つて言うんだ。私達と同年だけど、本当  
に小さな子供みたいなところがあつて。加減を知らないつて言うか、  
凄く素直つていうか……これ見て？」

気付いていた。枕元の棚の上に置かれた大きな藤籠に堆く積まれ  
た、赤々と輝くリンゴの小山。

その横に置かれた僕の花束なんか全然印象に残らないくらい。

「凄いな……」

そうとしか言いようが無い。

「でしょ？ あと1日2日の検査入院で、こんなに食べきれないつ  
て。自分の家でとれたもので、凄くおいしいし、体にもいいから沢  
山食べてねつてくれたんだけど」

唯一の友人だという、陽子さんのことを語る彼女は、言うほど困

った様子には見えなかった。

「自分の家であつてことは、その子“村”の子？」

水無瀬市東部に位置する未開発地域を、市街中心部に住む僕ら学生は、単純に“村”と呼ぶ。近代化された市街部とは違い、村には田園風景が広がり、未だに旧態然とした独自の村社会が形成されているそうだ。

「そうよ。大鳥居のある北の山があるでしょう？ その麓の畑の家の子」

「その陽子さん、僕達と同じ学校？ だとしたらずいぶん遠くから通つてるんだね……大変そうだ」

「陽子は深青中だからもつと遠いわ。西の今須山の山中にあるから、毎日市内を横断してるみたいなものね」

「うわ……僕には無理かな。でも深青に通つてるなんて、頭良いんだね」

「ぱつと見、そうは見えないけどね。体力は有り余つてる感じの子だから、通学距離は全然気にならないみたい」

手厳しい言葉とは裏腹に、彼女は楽しそうだった。本当に仲が良  
いんだろう。

その話を聞いて思い出した。きっとあの子だ。

何度か彼女と校門前で話している、他校の制服を来た少女を見かけたことがある。

その子の印象が、彼女から聞く話とぴつたりだ。

全体的に作りの小さな、ショートカットで良く日焼けした、健康  
そうな女の子だった。

猫のように好奇心に溢れた瞳と、細い手足が、なんだか中性的に  
見えたのを覚えている。

「そうだ、新田君も食べない？ 確かにおいしいのよ、このリンゴ」

「じゃあ遠慮なく」

籠の中から適当に一つ取ると、いただきます、と無造作に噛り付  
く。甘い果汁があふれ出して口元を伝うのを、リンゴを持った手で、

ぐいと拭う。たつぷりと蜜を含んだ実は、シャキシャキとした歯ごたえで、とてもおいしかった。

彼女はぼかんとした顔をして僕を見ていたが、呆れたような笑顔で、籠の脇に置かれた果物ナイフと小皿を指差す。

「新田君で結構ワイルドなんだね。はい、タオル」

「そうかな？ でもこのリンゴ、本当においしいね」

話しながらも一口、二口とかじる。うまい。

「もっと食べる？ 剥いてあげようか」

咀嚼の最中だったので無言で頷く。

「新田君、陽子と気が合うかもね」

「どうして？」

「子供みたいなところがそっくりだもの」

そう言いながら悪戯っぽく笑って、彼女は果物ナイフを手に取った。

「あ」

「何？」

もももごと歯切れの悪い物言い。

「手、離そうか？」

言われるまで気付かなかった。相手の体温が馴染んで気付かなくなる程の間、僕は手をつないでいたのだ。

「ごめん」

手を引く。何か音も無く続いていたものが、ふいに途切れる感覚。名残惜しかった。

「どういたしました・・・・・・」

彼女の受け答えもどこかおかしい。

さくさくと音をたててリンゴを剥き始めた彼女だったけれど、どうも手元が怪しく見える。

「大丈夫？」

「平気。ちよつと緊張してるだけ」

動きがぎこちない。時々刃がズルッとリンゴの表面を滑っている。

「痛っ！」

ついにやってしまった。左手親指の先、浮かんだ血の珠が見るうちに膨らんで張力を超え、重力に引かれて流れ落ちる。上掛けに点々と血の跡がついた。

溢れ出る彼女の血。

傷口は小さい。がナイフの先を刺したようで、深そうだ。

彼女がきつく眉を寄せた。僕は慌てて先程受け取ったタオルで傷口を押さえた。小さくうめき声上がる。

「ごめん、切っちゃった」

僕がかぶりを振った。

「痛む？ ちょっと深いかも」

白いタオルにじわりと血が広がっていく。止まらない。

血が流れる。白いワンピースを溶かして、焼けたアスファルトの上。どこからか、焦げたゴムのような臭いが漂ってくる。

違う。

それはもう、思い出す必要の無い記憶だ。

それも違う、だってあれは実際になかった事で、全部僕が地下ガスを吸い込んで見た幻覚で。

世界が揺れる。均衡を失っていく。

つい今しがたまで満ち足りて、幸せだと思っていた世界は、なぜ、こんなにも脆い。

均衡を失いつつあるのは、実は僕の世界であるのだろうか？

「新田君」

声がする。

「新田君！」

目の前に彼女の顔があった。

「大丈夫？ 顔、真っ青……血、苦手だったんだね、これから気をつける」

呆然と彼女の顔を眺める。口が動いていて、声が聞こえる。何を言っているのか、ちゃんと耳に入っているのに、理解できない。

「う、あ……………」

何かを返そうと口を開いても、何を言ったらいいのか。口から呻き声が漏れるのを、まるで他人の声のように聞いていた。

「本当に大丈夫？ ごめんね」

「そうじゃない。そうじゃないんだ。」

「先生呼ぼうか？」

僕は、不思議なんだ。何が不思議かって？ 決まってるじゃないか。君は死んだんだぞ？ 僕の目の前で、悪い冗談みたいな、血の溢れ出す肉の塊になって 死んだんだ。

いなくなつた人間は、決して帰ってはこない。

おかしいじゃないか。

何故、君は、ここにいるのさ？

「新田……………君」

病室のドアが鳴った。思ったより大きなノックの音に、弾かれたように体を震わせ、僕は我に返つた。

心配そうな表情の彼女を見て、猛烈な罪悪感が湧き上がってくる。自分は一体、何を考えていたんだ。

「ごめん、平気。ちよつと動揺しただけ……………情け無い」

「良かった……………どうしちゃつたのかと思つた」

体中の息を吐き出すような彼女のため息に、再びノックの音が重なつた。

「若宮さん？ 検査の時間ですよ」

僕をこの病室に案内してくれた、看護師さんの声だった。

「残念……………もう時間みたい……………じゃあ、いってくるね」

白く瑞々しい素足を病院着で覆うようにして、彼女は足元のスリッパを履くと、立ち上がった。

備え付けの洗面台に駆け寄ると、血に塗れた手を洗いながら、ド

アの向こうに呼びかける。

「今出ます。少し待ってください」

僕はその背中に声をかけた。

「その傷も、ちゃんと見てもらいなよ？」

「うん……分かった」

「僕の連絡先、書いて置いておくから」

「ありがとう」

振り返って満面の笑み。なんだ、自分だって子供みたいじゃないか。

「私ね」

彼女は洗面台に向き直って言った。背中越しの声は、なんだか遠い。

「Z症かもしれない」

Z症？

聞いたことが無い。それは……病気なのだろうか？

「新田君、知ってる？ Z症」

「知らない 病気、なのかな？」

その問いに、彼女からの答えは無かった。

「怖かったんだ。事故にあってから、色んなことがあやふやになっていくみたいで……」

蛇口から流れ続ける、水の音。

「今立っているここが、まるで知らない世界のような気がして。記憶も定かじゃないから、余計に不安になって」

僕と同じだ。

「でも覚えてた。事故の時の、新田君のこと。それだけは、はっきりと。おかしいよね？ ガス事故で記憶があやしくなるくらい意識が朦朧としていたはずなのに。新田君の姿だけは、網膜に焼きついたかったみたいで、はっきり覚えてる」

僕も覚えている。臭いまでもはっきりと。

「事故の時、新田君、凄い顔してたよ？ 何だろう、何もかも無く

しちゃったみたいなの、悲しいのか、怒ってるのか分からない顔。丁度、さつき病室に入って来たとき、そんな感じだった。私……  
・新田君のそんな顔見てたら、どうしても元気になつて欲しくなつて

彼女は振り返った。涙は見えない、けれど彼女は泣いていた。

「私、笑ったよ。そんなに悲しい顔しないでっ、声は出ないし、体も動かなかつたけど、思っただけは伝わるようになって 笑った

あとは声にならなかつた。

よろける彼女に咄嗟に駆け寄って抱きとめ、支えた。

「ありがとう。僕も、覚えてる」

支えられたのは、実は自分なのかもしれない。

今、はつきりと思ひ出した。

それが幻覚によつてもたらされた、偽りの記憶であろうとなかろうと。

血と肉と骨の丘で、全ての自由を奪われて、取り残されてしまった彼女の首は、初め取り澄ましたような気の無い顔をしていた。しかし 徐々に動かないはずの目じりは下がり、口元が弧を描き、慈しむような、優しげな、愛しい笑顔へと。

そのときまさに死に逝く瞬間に“最期の笑顔”を。

向けられた対象を妬ましくさえ思ったそれは、正に自分に向けてのものだったのだと。

「ありがとう」

僕は繰り返した。

胸に、シャツ越しに染み入ってくる彼女の涙を感じた。

僕ら二人の両腕は、互いの背中にまわされた。そこから伝え、伝わってくる気がする。

全てが遅く、終わり、過ぎ去ってしまった後悔が。

“終わり”を超えて、ようやく始まることのできた奇跡への、感謝が。

今この時があることが、自然の摂理に反した、いかにおぞましいことであるうとも、このこと自体を奇跡と呼ぶことは、きつと許されるに違いない。  
そう思った。

## 第5話

彼女はその後、看護師に連れられ、検査を受けに病室を出て行った。

開け放たれたドアの向こうから、病院着の血痕の理由を誰何する会話が聞こえ、遠ざかって行く。

僕は自分の連絡先を書いたメモを、ベット脇の棚に残し、病院を後にした。

また明日、来よう。

今日中に運良く検査が終わるならよし、そうならなくても明日になら、会うことぐらいはできるはずだ。

話したいこと、聞きたいことは、まだまだ沢山ある。

それまでに、自分の考えを、改めて整理しておく必要がある。僕はその内一つ、最も重要な問題を、自分の目で確かめるために、あの場所へ向かった。

交差点は、静かだった。

先日の事故の時間より、少し遅い。

車の通りは疎らで、時おり通り過ぎる車のエンジン音が、やけに大きく辺りに響き渡った。

事故の調査も工事も、とっくに終わってしまっているのだから当然のことだが、事故の関係者らしい人間は、全く見当たらない。

それとも見えていないだけで、今もこの交差点の地下深くでは、本格的なガス管工事が行われているのだろうか？

数人の通行人に混じって青信号を渡る。

あの日、彼女が渡ろうとした方の横断歩道だ。

走ってくる車の姿は無いが、異常に緊張した。

横断歩道の中程に差し掛かる。

僕の幻覚の中で、彼女がトラックにはねられた場所。

足を止め、じつと道路を眺める。

ここから交差点の中央まで、黒々とトラックのブレーキ痕が続いていた。

そんな痕跡は、どこにも無かった。

事故の時は、向こう側の信号からでも、はっきりと見えていたのに。

もしかして、現場検証後にも消されたのかもしれない。

にわかには納得できず、その場にしゃがみこむ。通行人の中の何人かが、何事かと訝しげにこちらを見ているが、構わずアスファルトに顔を近づける。

隙間につまったタイヤ片がないかと思ったのだが………これも見当たらない。

まるで、新たに敷き直されたかのように、アスファルトはギラギラとした油っぽい光を反射していた。暑さで額からぽたりと垂れた汗が、隙間に吸い込まれていく。

そうだ。

このアスファルト道路は、新しすぎやしないか？

記憶を辿ってみる。道路の新しい古いなど、普段から注意を払ってはいない。新しくなっているとえば、そう見える気がするし、前のままだと言われれば、そうも思える。

向こう側、事故当日、自分が渡った方の信号も、同じように調べてみることにする。

場所は　彼女が崩れ落ちていた場所。

思い出すと胸が締め付けられたように苦しくなり、眩暈がした。だからといって、諦めるわけにはいかない。

僕は念入りにその場を調べた。が、どこにも血痕らしいものは、見つけられなかった。

かんかん照りつける、夏の午後の日差しに炙られ、熱気を揺らめかせて、鈍く光るアスファルト。

それだけだった。

やはり……ここであったのはガス事故なんだ。  
常識的に考えれば、当然そうなのだ。

だからこそ彼女は死なず、事故の痕跡も無い。  
しかし。

いくら頭では分かっているても、僕の脳は、幻覚と言われた僕の見  
た交通事故の光景こそが、現実にあつたことだと主張し続けている。  
薄まるかに思えたその考えは、時間を追うごとに、逆に、強くなっ  
ていく気がした。

それを全面的に肯定することは怖かった。

それをすれば、僕はこう呼ばれる。

狂人、と。

そして僕は、その不本意な呼び名に対して、こう申し開きをする  
だろう。

「僕は狂ってなどいない！ 全て本当に見たことなんだ！」

最悪だ。

厄介なことに、狂人と呼ばれる人々の多くは、そう主張するのだ。

僕は、狂ってしまったっているのか。

横断歩道にかがみ込み、地面に鼻をこすりつけるようにして、何  
かを調べている時点で、周りからは相当奇異の目で見られている。  
正常な羞恥心の持ち主であれば、とても真似できることではない。

しかし僕は、もうそんなハードルは、いとも簡単に越えてしまっ  
ている。

僕は、狂ってしまったのに気付かないでいるだけなのか？

激しいクラクションの音が耳に突き刺さり、僕の思考を中断した。  
咄嗟に顔を上げると、信号はとくに赤に変わっていた。

横断歩道を渡った向こうの歩道に立つ、見知らぬ女性が、口元に  
手を当て、零れ落ちそうな程に目を見開いて、こちらを凝視してい  
る。

首をめぐらせると、大型のトラックが、こちらに近づいてくるの  
が見えた。

地面に膝を着いた姿勢のまま、僕はどんどん大きくなるトラックの、銀色に鈍く光るバンパーを見つめていた。

全てがゆっくりと、スローモーションに見え、痺れたようにじんじんする頭の中で、彼女もこんな光景を見たのだらうかと、ぼんやりと考える。

ブレーキ音。すべる車体。ゴムの焼ける臭い。あの時と同じ。

唐突に、もの凄い力で、体が後方へと引かれ。

尻餅をついた格好の僕の目の前に、停車したトラックの横腹が見えていた。

つい先程まで僕がかがみ込んでいた場所に、トラックは止まっていた。

トラックの窓が開き、運転手が怒りの形相で何かを怒鳴っているが、あまりの出来事にショックを受け、言葉が理解できない。

僕はどうやら誰かに抱きつかれ、歩道側へと、共に倒れ込むように引き戻されたらしい。

そうしてもらわなければ、僕は今頃。

僕ともつれるようにに道路に座り込んでいる人物を振り返る。

「……………菊池……………さん」

「菊池さん、じゃありませんよ！ 賢一さん！」

もの凄い形相の菊池さんに、言葉が詰まる。

菊池さんは腰砕けの僕を背負って立ち上がると、早足で歩道に戻った。

文句を言い足りないのか、トラックの運転手は未だに怒鳴り散らしている。それに菊池さんがぺこぺここと頭を下げると、ようやくトラックは走り去って行った。

歩道に戻った僕達、いや、僕が轢かれそうになったところを間一髪救った菊池さんに、歩道で様子を見ていた数人の野次馬の間から、まばらな拍手が上がった。

菊池さんは困ったような表情で、やっぱり何度も頭を下げた。

本当に頭を下げないといけないのは、自分だと言うことは分かつ

ていた。だけど全身から力が抜けてしまい、言うことを聞かず、僕は馬鹿みたいに宙を見つめながら、菊池さんの背中に負ぶさっていることしか出来なかった。

「どうしてあんな所で、ボーっとしてたんですか？」

菊池さんは呆れたような笑顔で、ベンチに腰掛けた僕に、缶コーヒ―を差し出す。

礼を言っ受けて取ると、プルリングを引き、乾ききった喉に一気に流し込んだ。暑さと緊張でへばりついた喉が、その潤いでべりべりと剥がれていくような心地がした。

「本当に……ありがとうございます。もし菊池さんが助けてくれなかったら……僕は……」

鼻先を過ぎるトラックの車体と、頬を叩く突風を思い出すだけで、また冷や汗が噴出してくる。

あのままだったなら、僕は“あの彼女”と同じ姿になっていただろう。

「もう、それは良いんですよ。過ぎたことなんですから……それよりも私が気になっているのは、どうしてそんな事になったのか。その訳です」

菊池さんは僕の隣に腰掛け、自分のコーヒ―を開けると、ぐいとい一口飲み、自分の足元の辺りを見つめた。

「昨日の今日知り合っただばかりの私には、やはり話しづらいでしょうか」

「いえ、そんなことは……」

命の恩人である菊池さんには、ちゃんと話をしておいた方がいいだろう。

「あの……僕、確かめたかったです」

「確かめる？ 何をです？」

僕は一瞬躊躇した。もしかしたら、菊池さんに頭がおかしいと思われるかもしれない。

そんな僕の気持ちを知ってか知らずか、菊池さんは僕の顔を覗き込んで、大丈夫だと言うように、笑顔で一つ頷いた。

「事故、をです」

菊池さんは無言で僕の話の続きを待っていた。

「菊池さんはきつと、僕がおかしな人間だと思っでしようけど……」

笑顔のままゆっくりと大きく首を横に振る菊池さん。少し気持ちが軽くなった。

「僕は、僕の見た事故。菊池さんが、地下ガスを吸い込んだことを見た幻覚だと言っていた、あの交通事故のことです。あれが、本当にあったことのように思えて仕方ないんです」

あんなにもはつきりとした幻覚なんて。

「だから事故のあった交差点に、その証拠が残っていないだろうか。ブレーキ痕や、その……彼女の……血痕が……」

「そうですね……それで……」

菊池さんは、少し悲しそうに言った。

「それで、事故の証拠は見つかりましたか？」

僕は無言で首を振る。

「分かつてはいるんです。あの事故が現実なら、彼女、若宮さんは生きているはずが無い。なのに頭のどこかが……どうしてもあの事故が幻覚であると認めたがらない。苦しいんです……」

「僕は……どうすればいいのでしょうか……」

「おつらい……でしょうね」

ぼつりと言った後、菊池さんは続けた。

「では……こうは、考えることはできないでしょうか？」

『交差点で起きたのが、どんな事故でもかまわない』と。賢一さんは今無事に、こうして話をしている。賢一さんのお知り合いの若宮さんもまた、無事だった。賢一さんを悩ませている交通事故の記憶ですが、それが幻覚であろうとなかろうと、賢一さんにとっての現

「状は、全く変わりがないわけですから」

「僕は頷いた。」

「僕も、それは考えました。結局、そういうことに落ち着くしかないんだと、僕もそう思います。だからこそ、それをはっきりさせる意味でも、あの交差点に行っただんです」

「それで　いいんだ。」

「もうちょっと、変な話をしてもいいでしょうか？」

「人に話すことでつく踏ん切りもあるだろう。菊池さんには、どんなことも話せてしまいそうな、安心感がある。」

「もちろん、かまいませんよ」

「予想通り、菊池さんは頷いてくれた。」

「突然でなんですけど……僕、若宮さんに対して、特別な感情を持っていました」

「菊池さんの顔が「やっぱりね」といった感じの笑顔に変わる。少し気恥ずかしい。」

「若宮さんが事故にあって死んでしまったと思って、落ち込みました。だからそれが幻覚で、若宮さんが生きていたことは、本当に良かったと思った」

「けれど。」

「気が急いで、早く若宮さんに　会いたくて。僕は、昨日からどきどきしていました。なのに今日、病院で実際に若宮さんに会った時、全く何も感じなかったんです。まるで顔を知らない他人を見るように、僕の胸には何の感情も湧き上がってこなかったんです」

「菊池さんは「え？」と驚いた表情で固まった。無理もない、僕自身なぜなのか分からないのだから。」

「僕は戸惑いました。どうして若宮さんと会ったのをあんなに楽しみにしていたのに、こんなに自分の心は無感動なのだろうと……」

「病室で彼女の姿を見たときの、あの虚無感。」

「でも、話しているうち　なにがきつかけになったのかは、はっ

きりとは言えないんですけど　また新しい感情が、僕の中に生まれたのがわかりました。今まで感じたどんなものとも違う、強い反面、どうしようもない不安定さを合わせもったその感情は、全部が若宮さんに向かっていて」  
うれしかった。

「僕はその瞬間、恋をしたのだと、はつきりと自覚しました」  
顔が熱い。僕は何を口走っているんだろう。

「それで、気になっていたんです。僕の中に新たに芽生えた感情が”恋”だったとして、なら以前に若宮さんに対して抱いていたものは、一体何だったのだろうと……」

「なるほど」

「菊池さんは、分かりますか？」

「はぁ……私はそういつた経験に乏しいので、その乏しい経験で語るのおこがましいとは思うのですが……」

菊池さんも照れているのか、頬の辺りを人差し指で掻きながら続ける。

「やっぱりそれも“恋”だったんじゃないですか？」

「そう　なんででしょうか？」

全然、別の物のように思えたのだけれど。

「確証はないですよ」

菊池さんは「ははは」と小さく笑った。

「ただね、賢一さん。私はこう思うんです。私たちは日々出会う色々なことに、色々な感情を抱きながら暮らしています。まるで異なつた形のトンネルを、次々にくぐっていくみたいだね」

そこで一旦言葉を区切って、菊池さんは遠くを透かし見るように空を見上げた。

「同じ事柄に対する感情は、不変ではありません。昨日嫌いだったものを、今日好きになることもあるでしょう。もちろん、その逆もあります。酷い時には、対峙する度に、感じる事が変わることもあるかもしれない。その都度、色んなことを、やっぱり考えるで

しょう。もし、その全てに名前をつけようと思ったら、私たちは、一体どこで感情を区切れればいいんでしょう？

そうですね、例えば賢一さんが、昨日嫌いだった女の子を、今日好きになったとしましょう。実際そんなことは少ないでしょうが、ここはドラマチックな事件が起こったりして、そうなったと仮定してみてください。ではその感情を、正確に呼ぼうとするなら、どう呼びましょうか？『昨日は嫌いだった子を、今日好きになって、明日はまた嫌いになるかもしれない好き』とでも呼びましょうか？」

菊池さんは僕のことを真っ直ぐに覗きこんだ。瞳は優しいげだったけれど、なんだか酷く寂しそうに見えた。

「賢一さんは今、若宮さんに恋をしていらっしゃる。若宮さんの話をしている賢一さんの姿は、私にはとても幸せそうに見えます。賢一さんが不幸せであるならともかく、恋をしていると自覚もなさっている今、手放し、見えなくなつた感情に名前をつけることは、あまり意味がないように思えます」

破顔一笑。けれど寂しげな印象は消えることはない。

「私なら……もつと別のことを考えますよ。例えば、その人を好きになれた幸せを、存分に噛締めたりとか　若宮さん、明日、明後日には退院でしょう？　どこかに誘って遊びに行く計画とか、たててみたらどうです？」

その言葉を聞いて、僕の胸は大きく跳ねた。

僕と彼女が一緒に遊びに行く。

つまりはデート。

両想いの男女が、二人で遊びにいったりすること。

ついさっきまで話したことも無かつた女の子とデート。

今しても仕方ないのに、緊張してきた。漠然と、そんなこともあるかもしれないと思つたけれど。第3者に改めて言われると、そのことが急に現実味を増して、目の前に迫ってくるようだ。

胃の辺りが熱い。鼓動が早まる。空気が少し、薄くなった気がした。

きつと彼女となら、一緒に街を歩くだけで、すごく楽しい。

「あ………」

彼女の言葉を思い出し、夢想は中断された。高揚していた気分が急激になえ萎んでいく。

Z症。

「どうかしましたか？」

「菊池さん、あの、Z症ってしってますか？」

「ええ？」

「Z症……何かの病気かもしれないんですけど、知りませんか？」

眉をひそめ、何かを考えている顔。間違いない、菊池さんは知っている。

「知ってるんですね？　もしかして、重い………病気ですか？」

しばらく菊池さんは黙っていたけれど。

「私も良くは知りません。同僚の女子所員が噂をしているのを、聞きかじったぐらいで………賢一さんは、どこでその名前を聞いたんですか？　どうしてそんなことを聞きたがるんです？」

そう切り出した。

彼女の泣き顔が脳裏を掠める。

「いえ………ません。すみません」

「そうですか。何か事情がありそうですね」

「はい、それも………言えないんですけど………どうしても知りたいんです」

菊池さんは、それでも笑ってくれた。

「いいえ、そんなに改まらなくても、私の知っていることはお教えしますよ。私が迷った理由は、その『Z症』に関する話が、話すことをためらうほど重大なものだからというのではなく、仮にも市の公務員である私が、『Z症』のような事実無根の流言を話してしまうっていいものかどうか、ということについてですから」

「事実無根って……どうということですか？」

菊池さんは眼鏡を外すと、拭き始めた。

「はい、整理してます。少し待つてくださいね」

しばらく菊池さんは伏目がちに、じつとなにかを吟味するように眼鏡を拭いていた。

野良猫がいるばかりで、周りに人影のない公園のベンチで、僕はじつと菊池さんが話し出すのを待つ。

やがておもむろに眼鏡をかけ直すと、菊池さんは語り始めた。

「お待たせしました、まとまりました、お話しします」

僕は菊池さんの口元を見つめ、話を聞き漏らさないように集中する。

「まず最初にはつきりと申し上げておきますと、Z症というものは実在しません。そういう病気があると、まことしやかに噂されていますが、少なくとも私は、そう確信しています。その理由は私の話を聞いてくだされば、自ずとお分かりになるでしょう」

菊池さんは自信ありげにきっぱりと言い切った。

「さらに前置きしておきますと、これは先程も申し上げた通り、私が聞いた女子所員の噂話によるところの内容がほとんどで、まるで確証のない話だということです。そしてそれだけをお伝えしても整合性にかけると判断しました。ですからこれから話す内容は、その隙間を埋めるために、私の推測を含みます。けれどもそれは補足程度のもので、大筋を歪めてしまうものではありませんからご安心を。けれども私は、賢一さんが誰から、どんな内容の話を聞いたのかしりませんから、賢一さんが話を聞いたというその方自身のZ症に対する認識と、差異が生まれる可能性があることは、あらかじめご了承くださいね。

ではまずZ症と呼ばれる病気の発見者ですが、くだんの女子所員の言葉をそのまま使わせていただくと『ハーバード大学のなんちゃら言う博士』ということですよ。この時点でもうあやしいですね。つまり『不明』ということですよ。

なんでもその博士は、人類始まって以来の天才医学者で、人間の“生”に関してただならぬ執着を持っていたとのことで。それで様々な実験を重ねた結果、不老不死の薬を作り上げてしまったのだそうです」

その時僕は、小声で菊池さんが、ばかばかしい、と吐き捨てるのを聞いた気がした。ほとんど泣き声みたいなそれは、何故だか僕の耳にこびりついた。

「しかしそれは、正確には不老不死の薬などではありませんでした。なぜならその薬によってもたらされる効果は『生を永らえらせるもの』などではなく、『死んだ人間を蘇えらせるもの』だったからです」

日は西に傾きつつあるものの、まだまだ高い。それなのに僕は、背筋にひどい悪寒を感じて、身を震わせた。

蘇える死者。

本当に、出来の悪い冗談のような言葉の響き。

「博士はあくまで『生の延長』にこだわりましたが、研究はそこで行き詰まりました。私に言わせれば、死んだ人間を生き返らせられるだけでも凄いことだと思えますけど、なにしろ博士は“天才”ですから、それだけでは満足できなかったのでしょうね。ですがさすがに人類最高の頭脳を持つとされる天才医学者にも『死』というものの壁はあまりに高く、博士は自分自身で掲げた到達点の高さに、日に日に追い詰められていきました。

研究は、一向に進む気配を見せません。博士は一旦着目を変えて、不完全な不老不死の薬 仮に『死者蘇生薬』とでも名付けましょうか を見直すことにしました。博士の目指す不老不死の薬の、言わば前段階にあたるこの『死者蘇生薬』にも問題は大有りでした。それはこの薬が有効である人間が、極々少数であるということと、被験者に投薬した薬が有効かどうかを確かめる術が、実際に被験者を“殺して”その後“蘇える”かどうかをみるしかないということでした。

死者蘇生薬が有効な人間の身体的条件などは、全くわかりませんでした。というのも、その薬が有効に働いた例は、沼で水死した後蘇生したとされる、博士の愛娘だけだったからです。仮に博士の娘さんが本当に蘇生したのだとしても、それって本当に薬の効果なの？ って疑ってしまう凡人の私とは違い、天才博士はそれがまごう事無き薬の効果だと確信していたのです。

あまり嫌味な言い方をするのもどうかと思いますので、こんな話し方はこの辺にしておきましょう。博士はもうその時すでに、おかしくなってしまうていたのでしょうね。死者蘇生薬が有効な人間の条件さえ突き止めれば、不老不死の薬は完成するのだと思い込むようになっていました。そして一度に大量の実験結果を得る妙案を思いついたのです。

それは、都合よくもガス状に加工可能だった死者蘇生薬を、市街地に無差別散布し、その後致死性の高い毒ガスを同様に散布、その結果、薬の効果で蘇えってくる人間の体を研究し、薬の有効な人間の条件を導き出す、というものでした。ついにここまで来たか、という感じですね。

しかしその“大実験”の実行するにあたって、目前に迫るいくつかの障害がありました。致死性毒物を調査するために大量に拝借した薬物のため、大学からマークされ、何度か非合法に行った“実験”についても警察機関にばれかかっている、とても速やかに“大実験”を行える状況ではなかったのです。

じりじりと社会的にも追い詰められていた博士の元に、ある日一通の手紙が届きます。ここから、私たちに関係の深い話になってくるのですが。その手紙の内容はこういうものです。「貴殿が研究であるテエマに賛同の意を表し、共同研究を申し入れたし」送り主は「深青学園大学院、医学研究室」そうです、この水無瀬市の西にそびえる水無瀬三山の内一つ『今須山』の山中にある、あの巨学園からの研究客員要請だったのです。

ほとんど日本という国に対する知識の無かった博士でしたが、尻

に火がついた状態の博士は、渡りに船とばかりに、この要請に飛びつきました。博士は大量の毒物、死者蘇生薬と研究資料、そして唯一の実験成功例である自分の娘とともに、遠く海を渡り、この水無瀬市にやってきました。それは噂によると、1910〜20年頃。

日本が大体、大正と呼ばれていた時代の話です」

「あの、話の途中ですみませんが、質問があります」

「はい、なんでしょう」

「深青学園って、そんなに昔からあったんですか？ 僕は近くで見たことはないのですが、相当新しい校舎で、設備も申し分ないって話ですし、最近できた学校なのかと思っていたのですが」

「ああ、なるほど、確かにそう見えるかもしれませんが。でもあの校舎は何度も建て替えられた後のものですから、新しくて当然ですよ。あの学園は潤沢な資金をもっていますから、建て替えも頻繁に行っています。近い将来、山の中腹にある第二校舎も、新しくなるって話ですよ」

「へえ……」

「深青学園の歴史は、実はとても長いんです。深青学園の母体となった『深青塾』は1766年、十代將軍家治の頃に設立されました。以後明治維新後に『深青学士院』と名を改めます。そして明治天皇の崩御により時代が大正に移り変わり『深青大学』という名前に更に改名。これが今の深青学園の前身にあたります。その後1913年、当時友好国であったアメリカにある『ミスカトニック大学』という学校と姉妹校提携を結びました。日清、日露の両戦争の後、これからの時代に向けて国際的な社会感覚を磨こうという意図だったようです。その後起こる大戦によって一時途切れましたが、今もあの学園に留学生が多いのは、そのせいもあるんですね。あと日本女子大からの女学生受け入れによる女学部設立とか色々話はあるのですが、今は省きましょう。とにかく私達の知る深青学園という名前が変わったのは、二次大戦後のことです。今のような中高大院という教育体制になるのは、それからまたずっと後の話ですしね」

「ありがとうございます。お話、続けてください」

「ええ、分かりました。今ちょうど話にも出ましたが、ですから『深青学園』から要請があるということもあり得ない話なのでしょうね。一応当時の深青に博士が来たと思ってください。」

深青学園の客員研究者としてやってきた博士は、表向きこそ正常を装っていましたが、心の内に秘めた不老不死の秘薬への異常な熱情は、無くなってなどいませんでした。いいえ、無くなるどころではありません。極東の聞いたこともない島国にある、一地方大学に過ぎないはずの深青学園大学院には、当時最先端の実験設備や、良好な研究環境が、申し分ない程に整えられていました。それに煽られるように博士は、益々『大規模死者蘇生実験』の実現に向けて、着々と、周りにはそれと悟られないように慎重に、その準備を進めていったのです。

ついに全ての準備は整い、いよいよ実験の日がやってきました。博士は大学院施設のあった今須山の頂から、死者蘇生薬を散布しました。大学院での研究により、大気中でも活性しつづける『細菌』として精製培養に成功していた死者蘇生薬は、山からの吹き降ろしの風に乗って、瞬く間に市街に広がり、そこに生活する人々に『感染』しました。

そうです、これは実験ではありません。おわかりのようにこれはテロ、『バイオテロ』に他なりません。コの字型に高い山々に囲まれ、外界から切り離された、水無瀬市の地理も、この実験には好都合でした。そして空気から、人々の接触から、死者蘇生薬改め『死者蘇生細菌』は、この水無瀬市に蔓延することとなったのです。

赤々と夕日の燃える、黄昏時のことだったそうです。ちょうど今ぐらいの時間でしょうか。博士はその時山の頂から市街を見下ろして、何を思ったのでしょうか？」

いつの間に、そんな時間になったのか。僕は無言で西の空を見上げた。

血のように赤い夕日の逆光で、今須山は黒々とした威容を見せていた。その中に浮かび上がるように建つ白亜の建物群。深青学園の校舎群は、まるで墓標のように不吉なものに見えた。

「さあ、いよいよ仕上げの時間です。実験は、後は市民を大量虐殺するための純粹な毒薬　もちろんこれも、死者蘇生細菌同様に、空气中に十分馴染むように改良、いや、改悪と呼ぶべきでしょうね。……手を加えられていました　を、撒くだけという事になったのです」

ふつと、鼻から漏れるような微かな笑い。

「しかし　結局この実験は失敗しました。毒薬は、散布されることは無かったようです。それはなぜでしょう？　博士が急に罪の意識に目覚め、実験を中断したのでしょうか？」

「違います。実験予定日の翌日、博士は何か『肉食性の大型の獣』に襲われたらしい無残な姿で発見されました。念願だった大実験の最後の仕上げにとりかかったはずの博士の身に、何が起きたのかは誰にも分かりません。ただ一つ奇妙な事に、博士が死んだ同日、博士の娘が何処かへと失踪しており、それが何か暗示めいて結末をさせているようにも思えるのです」

菊池さんは、大きく一つ息を吐いた。

「これがZ症の発見者、というより、Z症と呼ばれる病気の原因である“細菌”を造り出した『狂った医学博士』の物語です。ここまでお話を聞いていただいて、言うまでもないことでしょうが、この話は全くのデタラメです。」

実は……少々恥ずかしい話なんですがね……私自身この話を聞いた後に、ちょっと興味を惹かれましてね。調べてみたことがあるんです」

「苦虫を噛み潰したような、とはこういう表情を言うのだろうか。なぜだろう？　このZ症の話は始めてからの菊池さんの様子は、どこか妙な感じだ。」

「深青学園大学及び大学院に、過去、ハーバード大学からの客員研

研究者が来た事実はありません。資料は1900年頃までしか遡ってはいませんが、それ以前は現実的ではないでしょう。少なくとも公式には、記録は残っていません」

目元に色濃く翳る疲労。

「では、話を続けましょう。博士は亡くなり、大規模実験計画は頓挫しましたが、博士は実験の第一段階である細菌の散布には成功していました。その細菌は繁殖力が強く、水無瀬に暮らす人々に拡大感染していきました。人から人にはもちろん、空気から、動植物から、様々な経路で、自らが知らぬ間に、ほとんどの市民は、死者蘇生細菌の保持者とされてしまっていたのです。

しかし、そのことは大した騒ぎにはなりませんでした。それはそうです。感染したとしても“発病”するかどうかは、死ななければ分かりませんし、その確率も、極々低いものでしかないわけですから。

細菌は、その保持者が死ぬまでは何の活動も行わないそうです。ただひたすらに、自己保存に努めるだけです。それでは、保持者が生きている間は何も変わっていないのと同じですし、そもそも当事者自身が、そんなご大層な細菌に感染しているなどは、夢にも思わないでしょう。

それでも・・・確率はゼロではありません。死後、発病したと思われる人物もいたという話です。では、発病後のZ症発症者の症状はどんなものなのか？ それはこうです『発症者はZ症の発症以降、老化せず、再び“死ぬ”こともない。ただし頭部 脳を、完全に損傷することがなければ』それ以外は、生前となんら変わることはないと言います。

Z症発症者は、もし傷を負ったならばたちどころに再生し、Z症以外のどんな病気にも感染しないそうです。そこから先は“永遠”の始まりです・・・それだけなら、発病を忌避するどころか

喜んで受け入れる、むしろ積極的に望む者さえいる事でしょう。ですが全てがそう、うまくいくわけではありません。この病には、

無視できないマイナスの特徴があります。それは、食事の傾向、嗜好が極端に変化することです。

まず、食欲が旺盛になります。発症者の生存に食事は必須ではないそのなので、食事という行為は全く無駄なものとも言えますが、きつと精神的なものなのでしょう、とにかく“食べる”ということに拘るようになります。それから野菜を食べないようになり、動物性蛋白質、つまり『肉』に食が偏るようになる。しかもその『肉』というのが問題で、それが豚や牛といった食用動物のものではなく

『人肉』なんです」  
耳を疑った。

狂気の天才博士。死者蘇生細菌。そして発症者の“人肉嗜好”

“死”から蘇えった少女。

彼女は言った。

「Z症かもしれない」と。

彼女は、泣いていた。

ふと、沈みかけていた夕日に照らし出された公園の影が、濃くなつた気がした。

「死者蘇生細菌感染症は、いつの頃からか『Z症』と呼ばれるようになりました。おそらくはその特徴　その頻度、欲求の強さまでは分かりませんが　人の肉を食べたくなる。ということと、脳を完全に損壊してしまわない限りは活動を停止しないということから、あの有名なホラー映画　死者が蘇えり、生きている人間達を襲い、喰らう　その映画の中に出てくる、蘇えった死者の生態に似ているとして、映画の題名の頭文字を取って、そう呼んだのではないかと、私は思います。」

誰が聞いてもデマだと思うこのZ症が、最近になって噂になりつつあるようです。それをまとめるところです。吹き出さないで聞いてくださいね。『博士の散布した細菌は、人々に感染し続けることで今も尚存在しており、今になってなんらかの理由で細菌が活性化し、死後の発症者が増えている』つまり私も、賢一さんも、水無瀬



ない。その都度、感謝したり、腹を立てたり、色々です。それです。ええたんです。いつも自分を騙す人間は、心に留め置いて、いつも注意しておけば、騙される頻度も減るかなあって」

菊池さんは笑った。

「私の周りにいる人間で、私を一番騙すのは誰だろう？　って考えて・・・それで、別のことに気がつきました」

ああ。

「一番、私を騙そうとしているのは　実は・・・自分自身なんじゃないかって・・・賢一さんは、どう思いますか？」

きつとこの人には。

「・・・いやあ・・・本当に変なことを言いました。

忘れてください。日も・・・落ちてきてしまいました。今日はもう帰りましょうか。私も、一旦役所にもどらないと」

蘇えらせたい人が、いるのだ。

## 第6話

3

家まで送る、という菊池さんの申し出を、考え事をしたいからと言って断り、僕は電灯に煌々と照らし出された夜道を、一人とぼとぼと帰路についた。

僕の家は市街地の住宅街にあり、きちんと区画整理されているので、村のように足元に気をつける必要はない。村では未だに、道路わきに設置された街灯の数が少なく、その上舗装されていない、土が剥き出しの道が多いらしいので、ただ夜道を歩くのにも灯りが必要になるそうだ。

便利なはずの街灯。けれど今は、目を刺すような強いその明かりが、なんだか妙に鬱陶しく感じられた。

自分がZ症かもしれないと言った彼女。

彼女はZ症のことを、どのくらい知っているのだろうか？

Z症が死によってしか発病しない病気だと言われていることを、知っていて言っているのだろうか？

だとしたら自覚があるのだろうか　自分が一度『死んだ』のだという自覚が。

ガス事故で意識を失ったことを、それと勘違いしているのか。

それとももつと強烈な　目の奥に明滅するありえない事故の記憶　死の、記憶があるのか。

はたまた別の自覚が　あるのか。

考えなければならぬことは、沢山あった。

けれど、そのどれもが、今この場で考えるだけでは、どうしようもないことばかりのようにも思える。

事故。彼女。Z症。

どうしようもないと分かっているけど、考えずにはいられなかった。とりとめの無い思考を、頭の中でこねくり回している内に、家の玄関に着いていた。

ポケットから鍵を取り出し、ドアを開けると、肉の焼ける芳ばしい匂いが漂ってくる。

今日も、昨日の夕飯の残りの焼き肉らしい。

途端に空腹を感じた。家に着くまでは、食欲などまるで感じなかったというのに。節操のない自分の胃袋に苦笑する。

「ただいま」

キッチンに向かって声をかけると、母の声が返ってきた。

「お帰りなさい。ご飯すぐだから、コウちゃんにも挨拶なさい」

はい、と返事を返し、仏間へと入る。

大笑する小さな遺影の前に正座して、手を合わせ、目を閉じた。

もし、彼が生きていたなら、僕は彼に相談をしていただろうか？

現実としか思えない幻覚。

彼女との関係。

そして Z 症。

そんなことを相談することが、出来ていただろうか？

キッチンに入ると、母がすでに食事の準備を終え、食卓に着いていた。

「お父さん、今日は遅くなるからって、さっき連絡あったわ。なんでも学校の方で、なにか問題があったみたいなの。だから先に食べちゃっていてくれたって」

父は、深青学園高校で教鞭を振るう教師なので、こういったことはよくある。

僕は、中学を卒業したら、深青学園高校に進む予定になっているが……あまり乗り気がしないでした。

深青学園は僕にとってあくまで“父の職場”であり、自分の通う学校というイメージではないのだ。自分の身内が学校にいるというのは、きつと双方にとってあまり気持ちの良いものではないだろう。

しかし、この水無瀬市内には、高校は深青学園と、公立の、偏差値が低めな普通科高校の二校しかなかった。

対して深青学園は偏差値が高く、僕の成績では合格はギリギリのラインだった。けれど市外の高校に通うには、僕の成績に合わせた学校となると、その通学時間は2時間近くにもなる。

僕は一人暮らしということも考えたのだが、母が頑として反対したので、深青に進むのが、最も合理的な方法だった。おかげで僕はこの夏休み、昼は図書館で自習し、分からないところは夜、父に質問しながら勉強するという、勉強漬けの毎日を送っていたのだ。

しかしここ数日は、全くその勉強はできていなかった。

勉強のことを考えている余裕は、まだ僕の心には無かった。両親はなにも言ってはこないが、内心はらはらしているのかも知れない。食事の最中も、僕は上の空だった。

空腹は感じているから、とりあえず食事は口に運ぶものの、あまり味がわからない。

「ねえ賢一、病院の方はどうだったの？ 若宮さん……. . . . .だっけ、元気だった？」

出し抜けもそう言われて、僕は面食らった。

どうって……. . . . .言われても。

うまく、説明できそうにない。

「元気そうだったよ。菊池さんの言っていた通り、どうして入院が必要なのか分からないくらいだった」

とりあえず無難な答えを返しておく。

「そう……. . . . .良かったわね」

と笑った母の笑みには、なんだか別の意味も込められているような気がした。

「ところで若宮さんは、中学卒業したら進学するの？ もしかして、深青学園に進むのかしら？」

「一応、受験はしてみるって言ってたけど……. . . . .突然どうしたの？ そんなこと聞いて」

「なら賢一もちやんと合格しなくちゃね。彼女だけ合格したりでもしたら、格好つかないでしょう?」

なるほど、そういうことか……

「……がんばるよ。そうはならないように、ね」

母はじつと僕の顔を覗き込みながら、満足そうに頷いた。

「そうだ、退院したら、若宮さんに一度、家にも遊びに来てもらったら?」

「そんな……いいよ」

冷静を装って返答したものの、僕は激しく動揺していた。彼女が、自分の家に来るなんて……それこそ考えたこともなかった。

「あら、照れてるの?」

突然になんてことを言い出すのか。

「いや、別に、そんなに親しくは……」

どうなんだろう。けど……家に呼ぶっていうのは、ちょっと抵抗があるような……

「そうなの?」

答えられずに黙り込んでしまう。

母の目が意地悪そうに細められる。何かを言いたそうな、薄い笑い。嫌な感じ。

「まあいいわ、でも、いつか紹介してよね」

「うん」

良かった……これ以上詮索されるのは堪らない。

「そんなに嫌がらないでよ。その彼女にちよつと親近感が沸いたから、会ってみたいかなって、少し思っただけなんだから」

拗ねたように食事を口に運ぶ母。

「親近感……って?」

「うん、母さんもね、事故で入院した事があって、それでその時、入院中にごく寂しい思いしたから、元気付けてあげられたらな……って思ったのよ」

初耳だった。いや、本当に小さな頃、一度そんな話を聞いたよう

な気がする。

「その若宮さんのあつた事故とは違うけど……結構大きな事故だったのよ。母さんの歩いてた歩道に車がつつこんできてね……本当に怖かった……次に気がついた時には病院のベッドの上で……お医者さんもね、おっしゃってたわ『助かったのが不思議なくらいだ』って……やだ、思い出しちゃった」

「何を？」

「その時のお医者さんの顔。母さんが助かって、病院で目を覚ました後、お医者さんに事故の話を知りたのだけど……その間中、母さんのこと、まるでお化けでも見るような顔で見てるのよ、その先生……全く失礼しちゃうわよね」

『助かったのが不思議なくらい』の事故。

僕は、はたと伸ばしかけた箸を止めた。

助かったのが不思議なくらいな、彼女。

またも幻覚に沈み込みかけける意識。

Z症。

不思議だった。子供の頃から。

年を取らない母が。

『いつまでもお若くていいわねえ』

母と買い物に出かけた時声をかけてきた、ご近所の井戸端会議常連メンバーは、おそらく母と同年代のはずだ。なのに、見た目はまるで違っていた。

その目の奥に揺らいでいたのは羨望と、その何倍も強い嫉妬。

母があまり近所付き合いをしない理由が、その時なんとなくわかった。

母がいつまでも若いことは良いことだ。

母を見て僕が抱く感慨はその程度のもだったが、こと本人においては、知られざる苦勞があったのだらう。

今こうして改めて見る母の姿は、とても若々しい。

若すぎる、と言つても良いかも知れない。

「どうしたの、賢一？ 母さん、なにか変なこと言つたかしら」

「うっん……なんでも。ただ事故の話、聞いたこと無いよ  
うな気がしたから。その事故つて……いつ頃のこと？」

「事故に遭つたのはね、お父さんと会う少し前の話よ。母さんが2  
4の時。話してなかつたかしら？ まあ話してあまり気持ちの良い  
ことでもないから……」

24才……なるほど、そのぐらいにも……見え  
る。

『博士の散布した細菌は、人々に感染し続けることで今も尚存在し  
ており』

『発症者はZ症の発症以降、老化せず』

菊池さんの声がよみがえる。

なにを。

「あら、お肉もう無くなつちやつたのね。ちょっと切ってくるわね」  
『食事の傾向、嗜好が極端に変化することです』

僕の家では、食卓にサラダが並ぶことは、ほとんどない。

なにを 考えている。

チカリと脳裏に光が瞬いた。

「つつ！ ああ……やつちやつた。いたたた……  
小さな悲鳴。オープンキッチンの向こうで、母が左手を抱くよう  
に前かがみになっていた。

手首を、白いシャツを赤く染めて、肘から血が滴り落ちる。

僕はのろのろと席を立ち上がると、覚束ない足取りで、母の側に  
近寄つた。

「母さん……大丈夫？」

まな板の上には、分厚い肉の塊と、やけに刃渡りの長い、血のつ  
いた包丁。

ステンレスのシンクの底に血が流れ、排水口に流れ込んでいく。

「ええ、久しぶりにやつちやつたわ」

顔をしかめながらも呑気に笑っている母に反して、血はかなりの勢いで流れ出しているらしくシャツの袖口から肘までは、血で真っ赤に染まっていた。

「そんなに心配そうな顔しなくても平気よ。ほら、もう止まったから」

バカな　流れ切らぬ血は、シンクに斑模様を描いている。

これだけの出血が、こんなに早く止まるものか。

「ちよつと傷見せて」

「だから平気だって。こんなの唾つけとけば治っちゃうわよ」

「いいから」

しつこく詰め寄る僕に、母は根負けしたように、左手をゆっくりと差し出した。

僕は蛇口を捻って勢いよく水を出すと、母の手についた粘り気のある血液を、傷口に触れないよう、丁寧に洗い流す。

母は、何も言わずじっとしていた。

血の混じった水が、渦を巻いて排水口に吸い込まれていく。

すっかり血を洗い流した後、僕は恐る恐る母の手を覗き込んだ。

傷は、無かった。

どこにも見当たらない。

「ね、もう止まってるでしょ？」

それどころか、傷跡さえわからない。

「じゃあ、お肉運んじやうから、テーパーにもどって。母さん服汚れちゃったから、着替えてくるわね」

なんなんだ……これは。

僕もカッターなんかで指を切った経験はある。

血が流れ出すでもなく、珠の様に浮き上がってくるような程度の傷であっても、こんなにも速く塞がったりはしない。

ましてや血が滴る程の傷など。

いや、僕はそれを見たことが無かったか。それもごく近い時間に今日、病室で、リンゴを剥き損なって負った、彼女の傷はどうな

っていた？

「テーブルに置いておくから、食べててね」

母はそう言い残して自室へと向かった。

僕は、なんの気なしに冷蔵庫を開けた。

飲み物。乳製品。調味料。そして

肉、肉、肉、肉、肉。

冷凍庫を開けると、冷凍された肉。

野菜室を開けば、そこにはほんの少しの主役と、鮮やかな赤い肉。

冷蔵庫の中は、いつもと変わらなかつた。

なのにこの 恐怖感。

今、僕は、大変なことを考えている。

Z症。

本当にあるのではないか。

力なく冷蔵庫の扉を閉め、テーブルへと戻る。

一人、音の無い食卓に着き、母が切り分けてくれた、肉の切れ端を眺めた。

何故か震えている手で、無造作に一切れ摘み上げると、生のまま口の中に放り込む。

噛む度にじゅっと溢れ出す肉汁と、錆びくさい鉄の味。

甘く、柔らかな食感を心ゆくまで楽しんだ後で、ゴクリと飲み下す。

ああ、なるほど。

そう思い至った瞬間、僕は椅子が倒れるほど勢い良く立ち上がり、廊下に飛び出した。

そのままの勢いでトイレのドアを開けて、便器に顔を突っ込むようにして吐く。

ほとんど未消化の肉が、びちゃり、ごろりと逆流してくる。

わかった。わかってしまった。

僕は彼女に恋をしている。

肉が喉に引っかかり、うまく吐けない。息が詰まる。

それ以前、彼女を知ってから、今日、病室で彼女に恋をするまで抱き続けていた熱情は。

肉の塊が便器に落ちるたび、溜まった吐瀉物が跳ね、顔を打った。酷い匂い。それが更なる吐き気を誘発させる。

あの熱情は 『食欲』 だった。

彼女を初めて見たときに感じた空腹。

彼女が生きていると分かった時に感じた飢え。

会いたいと思ったその寸前、脳裏を過ぎった言葉。

たい。会いたい。

食べたい。会いたい。

胃が痛い。裏返ってしまいそうだ。

気付かない振りをしていた。

それを認めたら、僕はここに居られなくなる。

人肉食嗜好 異常心理だ。

彼女を一目見たあの日から、僕の心の底には、自分にさえそうとはわからないよう偽装された、ある一つの欲望が住み着いた。

彼女を、食べたい。

柔らかかそうな頬に。ほっそりとした首筋に。豊かに膨らんだ胸に。優しく唇を当てるのではなく、滑り落ちるギロチンのように迷い無く、この歯を突き立てることができたなら。

溢れる血をすすり、皮を、肉を食い破り、温かく生臭い体内に頭を突っ込んで、苦味の強い臓腑を貪り、咀嚼し、喉を通る、少しばかり温度の違う新鮮な肉塊を胃に落とせば、煮え滾る溶岩のように熱く感じるのに違いなのだ。

きっとそれは、至福と呼んで差し支えの無い恍惚。

彼女を食べたいという狂った欲望を恋と偽って、僕は彼女を見つめ続けていたというのか。

あまりに、酷すぎるじゃないか。

嗚咽。自分で聞いたこともない声が出ていた。胃が捻じ切れそうなほど、収縮を繰り返している。

彼女のことが、食べたくて、食べたくて、仕方なかった。

一体どんな目で、僕は彼女を見つめていたのか。

彼女が向けてくれていた想いも知らずに、僕は全く違う思惑を描いて。

無くして良かったと心底思う。

そんな欲望が自分の中から、初めから無かったことのように消え去ってくれて、本当に良かった。

しかし、なぜ？

なぜ僕が彼女に覚えていた、飽くなき食欲が 突然に失われたのか。

「大丈夫、賢一！？ どうしちゃったの!?!」

うずくまる背中におかれた手が熱い。

気付くと母が、これ以上ないというくらいに心配そうな顔で声をかけながら、背中をさすってくれていた。

「救急車呼ぼうか？ どこか痛む？」

「母さ……ごめん……へい……き……」

母さん 聞きたいことがあるんだ。

あの日のこと。

僕が、熱を出して幼稚園から帰るのが遅れた、あの日のこと。

コウちゃんのこと。

母が僕をおいてコウちゃんを迎えにいつてから、僕は熱に浮かされた頭で、しばらく子供部屋でぼんやりとしていたが、そのうち一人、家に居続けることに耐えられなくなって、母の後を追って公園へと向かった。

公園に向かう途中の、夕暮れの街の光景は、赤くて、心細くて。

進む足は自然と小走りになった。

足がアスファルトを踏みしめる度、頭がぐらぐらと揺れたが、そんなことに構ってはいられなかった。

とにかく、母に、コウちゃんに会いたい。

僕が進む道に人影は無い。

寂しい。一人では、いたくない。

今は猫ばかりが集まるあの公園で、僕はコウちゃんと母を見つけた。

足を止める。上がった息で、肩が荒く上下していた。

周りには、他に誰も居なかった。薄暗くなった砂場に、コウちゃんが作ったのだろう、立派な砂のお城が建っていた。

母は公園の隅にある砂場の脇にうずくまって、虚ろな目をしてもう動かなくなっているコウちゃんの体に、頬擦りをしていた。コウちゃんのお腹の辺りは、夕焼けよりも真っ赤に染まっていて、その体の下には、同じ色の水溜りができていた。

母は、その中で、地に両膝をつき、ほとんど唸り声のような慟哭を上げながら、コウちゃんの体に顔を埋めていた。胸に掻き抱くように、大事に、大事に、誰にも取られることのないように。

母が頬擦りをする度に、静まり返った公園に、ぴちゃり、くちゃりと、コウちゃんのお腹にできた大きな穴から、水音がしていた。

母はずっとその場を動かずに、同じ姿勢のまま、何度もコウちゃんに頬擦りをしていた。

僕は見てはいけけないものを見てしまったような気がして、何も言わず家に駆け戻って、布団に包まって震えていた。

その後、母とコウちゃんを発見、通報した人の話では、母は全身をコウちゃんの血に塗れさせて、なにかに食い散らかされ、残り少なくなったコウちゃんの遺体を、両手に抱きしめていたのだと言う。

怖かった。だから確かめたかった。

最後のお別れのときに、コウちゃんを見て確かめたかった。

僕があの時見た、母が優しく抱きしめていたコウちゃんと、どこも変わりが無いということ。

「か……あさ……」

聞きたいことがあるんだ。

「コ……ウ……コウちゃ……は……」  
「違つよね？」

「何に……食べられた……の？」

僕は、年を取らぬ母に聞いた。

母は、何も言わなかった。

僕はうめき声を上げながら吐き続けた。

自分以外の誰かの嗚咽が、時折漏れ聞こえた気がした。

4

夜は、明けていなかった。短いはずの夏の夜。朝日は未だ、見えない。

午前4時、朝というには、まだ早すぎる時間。

この季節でなければ、夜中とさえ言える。

僕は、あの交差点に立っていた。

目の前を、巨大な貨物トラックが、まるでここが高速道路でもあるかのように、猛スピードで横切っていく。

この時間の大通りは、そんな車ばかりだ。

熱気を孕んだ夏の夜では、到底冷め切らぬ空気は、ぬめる靄となり、通りかかる車にことごとく覆いかぶさり、そして切り裂く豪風に千切られ、舞い上がり、地に落ちることを、飽くことなく繰り返していた。

部屋に戻っても、眠ることなどできなかった。

雑巾のように搾られた胃は、激しい痛みに対応することにさえ疲れたように、ぐったりとしたままだった。

ベッドに横たわっても、次々と頭に浮かんでくる事柄に翻弄されるばかりで、休まることなど少しもなかった。

中でもいくつかがことが、僕の思考を、強く縛り付けた。

なぜ彼女に食欲を感じなくなったのか？

まだ、生きている内にZ症を発症することはあるのか？

Z症の発症条件は 遺伝するののか？

もう、その疑問に関する答えは、ある程度自分の中で固まりつつあったのだけだ。

それにはつきりとした答えを得るには、『検証』が必要だった。

そのために、僕はここに来たのだ。

僕はもう 狂ってしまったのだろう。

それが何時からのことなのか、そのきっかけが何だったのか、僕には分からない。

あの交通事故を目撃した時からか、彼女を初めて見た時からか、コウちゃんの最後の姿を見たときからか……それとも、この世に生れ落ちたその瞬間からだったのかもしれない。

もし僕の予想が当たっているのなら、この検証の後、長い長い、病気との闘いが待っている。

年を取らず、自然と死ぬこともできず、永遠に動き続け、人肉を欲する、Z症患者として。

発症すれば、今の僕が暮らす世界とは、まるで違う世界の住人となることだろう。

寂しくは無い。

僕はこの、世にも稀な病気の発症者を、2人も知っている。

だが、恐怖はある。

発症後のことももちろんそうだが、その前の段階 “死”を、超えることができるのかどうかということだ。

ありえない妄想に囚われた、狂人の死に様を晒すか  
人肉に妄執する生ける死者となるか。

狂っているのだろう。

彼女の“最期の笑顔”を思い出す。頭が埋め尽くされる。

狂っているのだとしたら、何をおいてもまず、僕は 彼女への恋に狂っていたいのだ。

信号は赤。

道路の向こうから、明らかに法規速度を無視した鉄塊が迫ってきている。

その向こう、夜は白み始めていた。

迷いは消えない。

もし、ここから一歩足を踏み出したなら。

この僕に 『死者の夜明け』 は、訪れるのだろうか？

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3434d/>

---

Z 症

2011年7月5日03時21分発行